●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 13-3

もったいない感覚

目　次

「もったいない感覚」をもてない子どもたち……深谷昌志…… 2

〔調査レポート〕もったいない感覚 5

要約 …… 6

はじめに …… 10

1．身近な物への愛着 …… 11

●主な学用品 …… 11

●鉛筆の使い方 …… 13

●身のまわりの物 …… 17

2．もったいない感覚 …… 19

●もったいない物 …… 19

●生活の中で …… 22

3．金銭にも恵まれている子どもたち …… 25

●金銭的にリッチな小学生…… 25

●お金に対する感覚…… 28

4．落とし物への対応 …… 29

●落とし物に知らん顔 …… 29

5．母親のしつけをめぐって …… 32

●便利さや合理性を優先する子どもたち …… 32

●母親のしつけ …… 35

〔対談〕モノ社会と子どもたち……無藤　隆 vs 深谷昌志…… 39

・文献紹介『新・児童心理学講座⑪子どもの遊びと生活』 …… 48

資料1　調査票見本 …… 52

資料2　学年・性別集計表 …… 61

＊おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

「もったいない」感覚をもてない子どもたち

静岡大学教授
深谷昌志

貧しさからの解放

執筆の必要があって、『にあんちゃん』を手にしてみた。一昔前に読んで感動をしたのを覚えているが、父を亡くした女の子が母ときょうだいとで力を合わせ、炭坑の町の中で生き抜く話である。

映画化されたので記憶されている人も多いと思うが、その中に、1本の傘をきょうだいで使う挿話が書かれていた。家に1本しかない傘を、妹は働いている兄に使わせようと思い、兄は幼い妹に使わせようとする。

1本の傘をめぐって、兄妹のこまやかな愛情の通い合いが感じられて、涙のでる思いがした。もちろん、1本しか傘のない生活は貧しさが傘に限られていないであろうから、話として感動的であっても、どう考えても、しあわせな状態ではない。

したがって、貧しさの礼讃をするつもりはないが、貧しさの中に人間的な情愛が色濃く生き続けるのは何故であろうか。

教育実践面での名著『山びこ学校』は、現代風に読み直してみると、子どもの労働の歴史を扱っている。貧しくて学校に行けない子や山菜売りに行き金銭を手にしようとする子などの姿が、子ども自身の手で生き生きと描かれている。

テレビでも、「おしん」は古すぎるであろうが、貧しさの中を生き抜いていく話は感動的だ。正直にいって、ワンパターンのお涙ちょうだいのストーリーが多い。しかも、いずれ主人公は成功するのであろうから、こんなものにだまされないぞと思う。しかし、その時間が来るとチャンネルを合わせてしまう。その結果、貧しさから脱出する根性ものが高い視聴率を獲得することになる。

しかも現代が貧しくないので、自分の身につまされることなく苦労の話を見ていられる。しかし実際に身近に貧困があれば、テレビで見るようなのんびりとしたものであるまい。

特に、アジアなどへ行き、貧困の中で学校へ通うこともできずに働いている子どもたちを見ると、貧しさから子どもを救いたいと思う。

長い間、児童問題の専門家たちは貧しさからの解放を児童問題の中心課題に据えてきている。そうした意味からすると、子どもが貧しさと無縁になった現代の日本は子ども社会の天国であるかもしれない。

不足感のもつうれしさ

不足感にも限度があり、あまりに不足してしまうと、絶望感のほうが強くなりすぎるかもしれない。しかし、ほどほどの不足感のある状態だと、不足をうめようという気持ちがわく。

そして、一定期間待っていた後で、欲しい物が手に入ると、なんともうれしい。それがささいなノートや本であっても、そのときのうれしさは、大きくなった現在でも思いおこす。

第二次大戦が終わったとき、小学6年生だった。ほどなく草野球が、子どもたちの人気になった。しかし、ボールもグローブもない。石に糸をまきつけ、それを布でくるんだのがボール、そして、木の幹をけずったのがバット、グローブは手製の手袋だった。しかしバットはすぐにわれるし、グローブといっても手袋なので、ボールをとると痛いし、それに布が破れてしまう。

そうしたとき、闇市にグローブが売りにでていた。何日も、何日も、店の側を通り、グローブをみつめ、仲間とお金を出し合って、そのグローブを買った。とりあえず、ファーストがそのグローブを使った。次に、2か月くらいしてからキャッチャーミットを買い、さらにサード用のグローブと、道具が充実していった。

ボールが揃い、まがりなりにもバットを求め、グローブが5つくらいになるのに1年以上かかった。グローブが5つあれば、相手のチームの4つと合わせて、全員がグローブを持って野球ができる。

現代の基準でいうなら、スパイクもユニフォームもない野球だが、それでも十分に楽しかった。それから1年近くたち、自分のグローブを手にすることができた。古道具屋の主人が古いグローブを安く値引いてくれたからだ。家に持ち帰り、オイルをぬり、皮をなめらかにし、ボールを中に入れて、ボールをとりやすいグローブにした。

そして、油と皮のにおいのするグローブを枕もとにおいて、そのにおいをかぎながら寝るのがなんともしあわせだった。プロ野球の選手になれる日を夢みて、グローブを大事にしたのである。

グローブに限らず、ノートや鉛筆、靴、上着についても、それぞれに手にできたときのうれしい思い出がある。貧しさの中で暮らしていたので、物を手にするよろこびが大きかったのである。換言するなら、何かを手にするよろこびを知っているので、意欲的に不足感をうめようとしたのである。

昭和一桁生まれの戦後焼け跡闇市派はやる気に富んでいるといわれる。それは、常に物が不足していたので、やる気がなければ生きていけない時代だったからである。物不足の社会が生み出したやる気世代なのであろう。

満ち足りた社会の不幸

しかし、現代の子どもたちは、不足感のまったくないままに成長してきた。生まれてこのかた、物の不足したことがない。断水や停電はむろん、飢えやかわきも知らない世代である。

換言するなら、現代の子どもたちは、充足する楽しみを知らないのである。いつでも、何でもある。不足感を体験した世代からすると、なんとしあわせな状況だろうと思う。しかし本人たちは、何でもあるのが当たり前の中で育っているので、それが当たり前であり、不足する事態など考えられない。そうした意味では「もったいない感覚」をもてない子どもたちである。というより、考え方によると、「もったいない感覚」そのものが失われつつあるのが、現在なのであろう。

アメリカへ行くと、子どもの行動が制限さているのに出会う。レストランに子どもが

入ってくることはないし、コーヒーや紅茶は禁止している家庭が多い。また、子ども部屋を与える年齢は、自分なりに部屋を管理できるようになってからである。

子どもはおとなと違う。子どもは子どもなりの制限された世界で、しかし自由に行動すべきだというのが、アメリカの親たちの考え方である。コーヒーは厳禁でも、牛乳やオレンジジュースはいくらでも飲んでよい。また、子ども部屋を与えたら、その代わり、親は干渉しない。子どもなりに働いて現金を手にしたほうがよいというのが、その一例である。

おとなと子どもの世界とを分け、おとなの世界はぜいたくであっても、そのぜいたくさを子どもの世界に及ぼさないようにする。欧米では、そうした配慮が払われている。

豊かな社会の中で、子どもに欠乏感をいかに与えていくのか。子どもの成長を考えるにあたっての新しい重要な課題のように思われてならない。

〔調査レポート〕

もったいない感覚

東京学芸大学教授　深谷和子
横浜市立鳥が丘小学校教諭　戸塚　智
目黒区立不動小学校教諭　矢部　崇

調査レポート
もったいない感覚
要　約

1．子どもにとって大切な学用品でも、なくすと一生懸命探すのは、かばん、ふで箱くらいで、文房具類は「少し探す」くらいの子が３割から５割にも達する。（図１）

2．しかも、そうした物への愛着のなさは学年の上昇と共に増加していく。（図２）

3．ふで箱に７～８本以上も鉛筆の入っている子は３割近くもいるが（図３）、鉛筆に名前を全く書いていない子は６割近くもいる。書いてある子も１～２本しか書いていない子が多い。（図４）

4．しかし、使い終わった鉛筆は、なぜかそのままとっておく子が多い（図７）。愛着なのか、それとも単なる整理のできない状態なのか。

5．使い終わった物を捨てる子は、学年が上がるにつれてふえていく。（図９）

6．捨てられたり余ったりした物をもったいないと思う感覚は、学年の上昇と共に減っていく。（図11、図12、図13、図14、図15）

調査レポート／**もったいない感覚**

要　約

7．１か月に1,501円以上のおこづかいをもらっている子は、４年生で13%、５年生で19%、６年生で24%もいる（表１）。貯金の額の平均は、４～５万円にも達する。（表３）

8．自分の落とした物が見つかっても「知らん顔をする」子は、学年が上昇するにつれてふえていく。（表５）

●調査概要

1．**調査主題**　もったいない感覚

2．**調査視点**　豊かな社会といわれる現代に生きる子どもたちは、この豊かな環境にどんな感じを抱いているのか。さらに、子どもたちの中にある「もったいない感覚」を探る。

3．**調査項目**　学用品をなくしたとき、鉛筆の使い方、もったいないと思う程度、落とし物に対する対応の仕方、おこづかいの額、家で物を大切にする人、など。

9．自分を「物を大切にしない子」だと思っているのは、2割しかいない（図18）。しかし、家で物を大切にする人の順序は、祖父母＞母親＞父親＞自分の順だと子どもは評価している。（図20）

10．子どもが捉えている母親像は、物を大切にするきちんとした母親であり（図21）、子どもにも「もったいない感覚」を植えつけようとしている母親の姿である。その限りにおいては、子どもたちが学年の上昇と共に多分に「もったいない感覚」を欠いていくのは、やはりモノに不自由しない「時代」が生み出した姿なのかもしれない。

4．調査時期　1992年11月～12月

5．調査対象　東京、神奈川、千葉、埼玉に住む小学校4・5・6年生

6．調査方法　学校通しによる質問紙調査

7．サンプル数　（人）

学年／性	男　子	女　子	計
4　年	435	193	628
5　年	280	271	551
6　年	273	288	561
計	988	752	1,740

はじめに

今の日本の社会は、全体的にみてモノが過剰に氾濫している。過去に「使い捨て時代」などと称し文化的生活の象徴として、モノの多量の消費を誇るかのような風潮があったが、石油ショック以来、資源の有限性を考えるにあたって、いわゆる「省エネ」が叫ばれ、時代は方向転換していくかに見えた。しかし、これまでの習慣や意識は、そう急に変えられるものではなく、「リサイクル」という言葉が登場するまでは、「使い捨て」が高度経済成長を支える消費生活の王者として君臨し続けたのである。

ところが、「リサイクル」が盛んになってくると様相は一変した。企業、行政が努力を始めたことが、人びとの意識を動かし始めた。その１つの例が、紙の使い方、捨て方である。使うときには、表面だけでなく裏面にも印刷し、必要のないコピーはしない。また、捨てるときも、紙質によって分別し（今までは、紙類は全て燃えるゴミとして処理されていた）、できるだけ再生紙として利用しようとしている。こうした努力は紙に限ったことではなく、今までの生活環境全体を根底から覆す新しい力となって、実際の生活の中に入り込んできている。

小学校に通う子どもたちは、自分の手でお金を稼ぐ経験がないので、物の価値判断は、その家の環境による側面が大きい。豊かな社会といわれる現代に生きる子どもたちを取り巻く環境は、子どもたちの成長にどのように影響しているのだろうか。金銭を稼ぎ出す苦労や喜びを知らず、働く尊さを味わうことなしに、ただやみくもに消費者として子どもが成長していくことに対して懸念せざるを得ない。子どもは「もったいない」という感覚をもっているのだろうか。

本調査では、現代の子どもたちを取り巻いているこうした豊かな環境に対する子どもたちの感じ方を、さらに子どもたちの環境の重要な部分である家庭にも目を向け、子どもたちの中にある「もったいない感覚」を探っていこうとしたものである。

1. 身近な物への愛着

●主な学用品)))

まずはじめに、子どもたちを取り巻いている環境のうち、最も身近な学用品から探っていくことにしたい。

子どもたちは、毎日学校へ行くので、いろいろな学用品とのかかわりあいがある。まず、今、使っている物をなくしてしまったとき、どうするのかをたずねてみた。それが図1である。ここでは、学用品のうちから7点をあげ、「なくしたとき、一生懸命探す」と答えた割合の多い順に整理している。さすがに「なくしたときに探さない」という割合は少ないが、「一生懸命探す」ことについては、物によって大きな差がある。かばん、ふで箱については、90%以上の子どもたちが「一生懸命探す」と答えているが、サインペンや消しゴムに至っては、その割合は5割を切っている。逆に、「少し探す」程度の子どもが5割近く存在しており、「少し探してみて見つからなければ、あきらめよう」という感覚であることが読み取れる。同じ項目について図2では学年ごとに整理しているが、学年が上がるにつれて、「一生懸命探す」割合は減っている。特に下位のモノにいくにしたがって、その差は顕著である。こうした学年間の差は、これからの各データに表れていくので、その都度注目していただきたい。

図1　物をなくしたとき

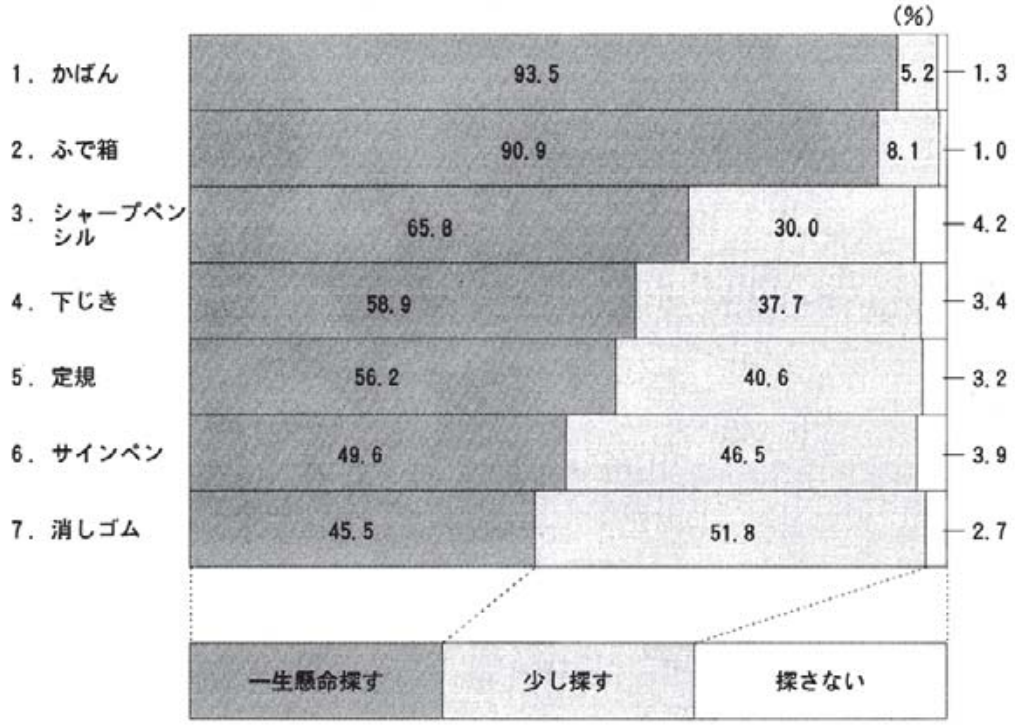
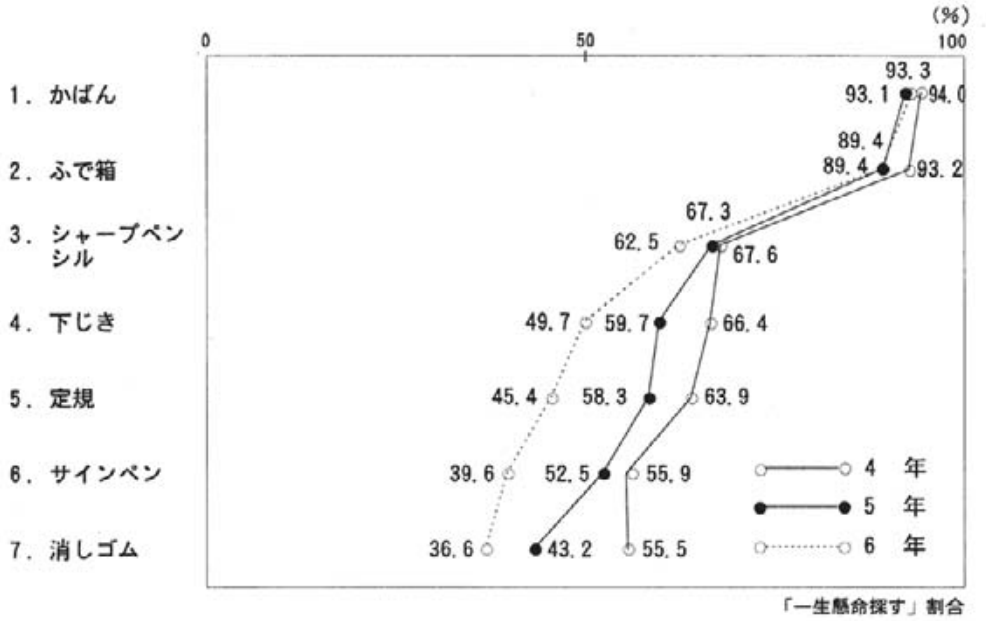


図2　物をなくしたとき × 学年



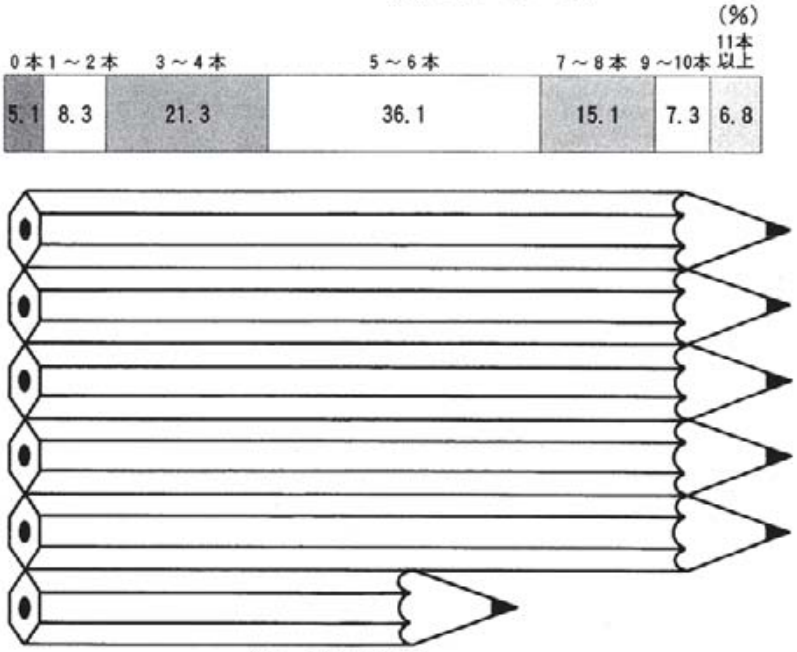
●鉛筆の使い方)))

もう少し、学用品に関するデータを紹介しよう。学用品の王様というべき鉛筆についてみてみる。

子どもたちが勉強に使うときに欠かせない鉛筆は、ふで箱の中に何本くらい入っているのだろうか。黒の鉛筆の本数をたずね、それを整理したものが**図3**である。1本も鉛筆を持ってきていない（0本）子が5％いるが、この子は、おそらく鉛筆の代用品であるシャープペンシル等を持っているのだろう。鉛筆の本数は、5～6本と答えた子が36％と最も多く、次いで3～4本の21％、7～8本の15％と続いている。全体を平均すると、5.64本の鉛筆がふで箱の中に入っていることがわかった。学年別では、4年生の平均が6.02本と最も多く、6年生では約1本少ない5.07本であった。

さて、問題となるのは、これらの鉛筆に対する愛着度である。その点をみるために名前を書いてあるかどうかに着目してみた。名前があれば、例えなくしたり落としたりしても、自分の手元に戻ってくる可能性が高い。**図4**

図3　ふで箱の中の鉛筆①
何本入っているか



全体　平均5.64本

4年　平均6.02本

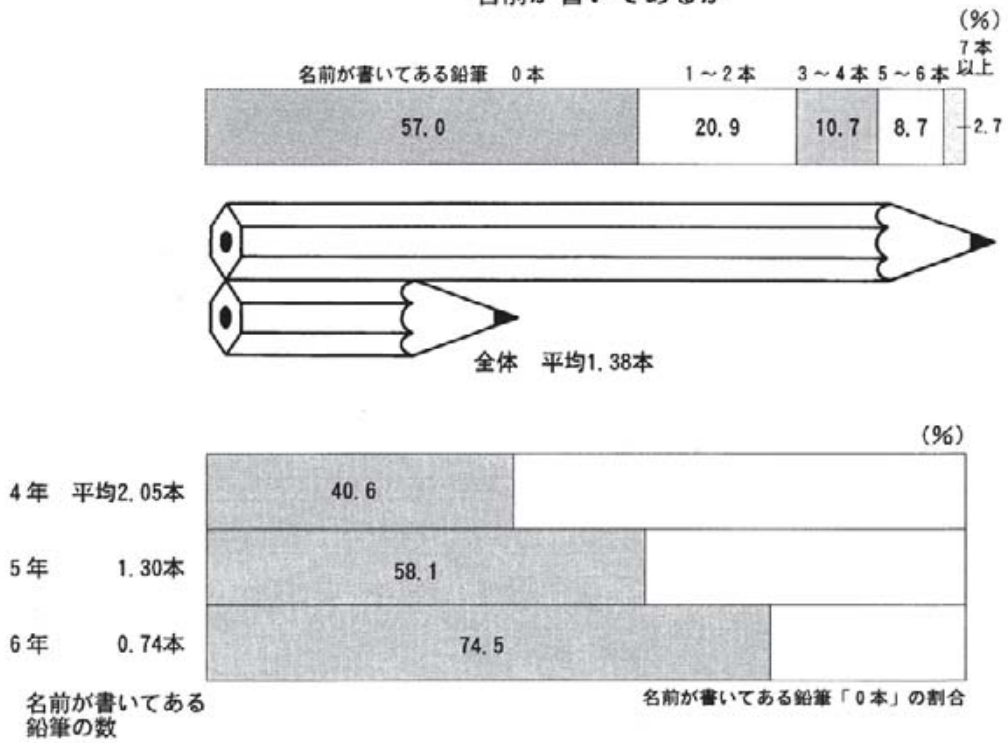
5年　　5.56本

6年　　5.07本

では、先の図3でたずねた鉛筆のうち、「何本に名前が書いてあるか」をたずねたものである。驚いたことに、名前が書いてある鉛筆が0本、つまり、ふで箱の中の鉛筆には1本も名前が書いてないと答えた子どもが57%もいるのである。全体として平均すると、1.38本しか名前が書いてない。どの子どもたちも、小学校に入学したときは、全部の鉛筆にしっかりと名前が書かれてあったはずなのに（つまり、これは家の人が名前をつけていたことになるのだが）、学年が上がるにしたがって名前を書いた鉛筆が減っていくのは、子ども本人の問題のみならず、家の人の対応の仕方にも問題があると考えることができる。家の人の対応については、本調査の後半に掲げる。

こうしてみてくると、鉛筆には「もったいなさ」を感じていない子どもたちが浮かんでくるが、本当にそうなのだろうか。次に子どもたちが鉛筆をどのくらいまで使おうとしているのか、たずねてみた。**図5**である。ここでは、今使っている鉛筆がどのくらい短くなったら新しい鉛筆と取り替えるかを聞いた結果を示した。それによると、下から2本目の、約5cmくらいの長さで取り替える子どもの割合が最も高く、全体の半数を占める。次いで割合が高いのが、それより短い約2.5cmで、35%である。平均すると、4.71cmになった時点で、新しい鉛筆に取り替えている。5cmより短い長さは子どもの手でも持ちにくいし、書きにくい長さである。子どもたちは限度いっぱいまで使っていることになる。この傾向は、学年では差がほとんどみられな

図4　ふで箱の中の鉛筆②
名前が書いてあるか



い（図6）ので、子どもたちの鉛筆に対する意識は、先のデータの記名の状況だけでははかれないものがある。使えるのであったら、とことん最後まで使おうという気持ちには、学年の差はないようである。

しかし図7によると、使い終わった鉛筆の処理の仕方に、学年差を認めることができる。使えなくなっても、その鉛筆をとっておく子どもは、全体で80%である。学年別のデータをその下に掲げてあるが、使い終わった鉛筆をとっておく割合は、学年が上がるにしたがって減っていく。4年生では88%、5年生で80%、6年生になると70%である。使い終わっている鉛筆を、なぜとっておくのかが疑問であるが、それでも多くの子が、すぐに捨ててしまうようなことがないと答えているのは、何となく「もったいない」と思っている子どもが多いということだろう。

こうした結果から考えてみると、子どもたちには、身近にあるモノが手元にあるうちは、最後まできちんと使っていこうとする姿勢がうかがえる。しかし、見えなくなるなど、1度手元を離れてしまうと、簡単に愛着を捨て、取り戻すことをあきらめてしまう。そして、すぐ次の新しい物へ関心を移す。無事に使い終わった物についての処理は、子ども一人一人に任されているが、自分の思い入れによって、意外に保存しておくようである。

図5　鉛筆を取り替える長さ

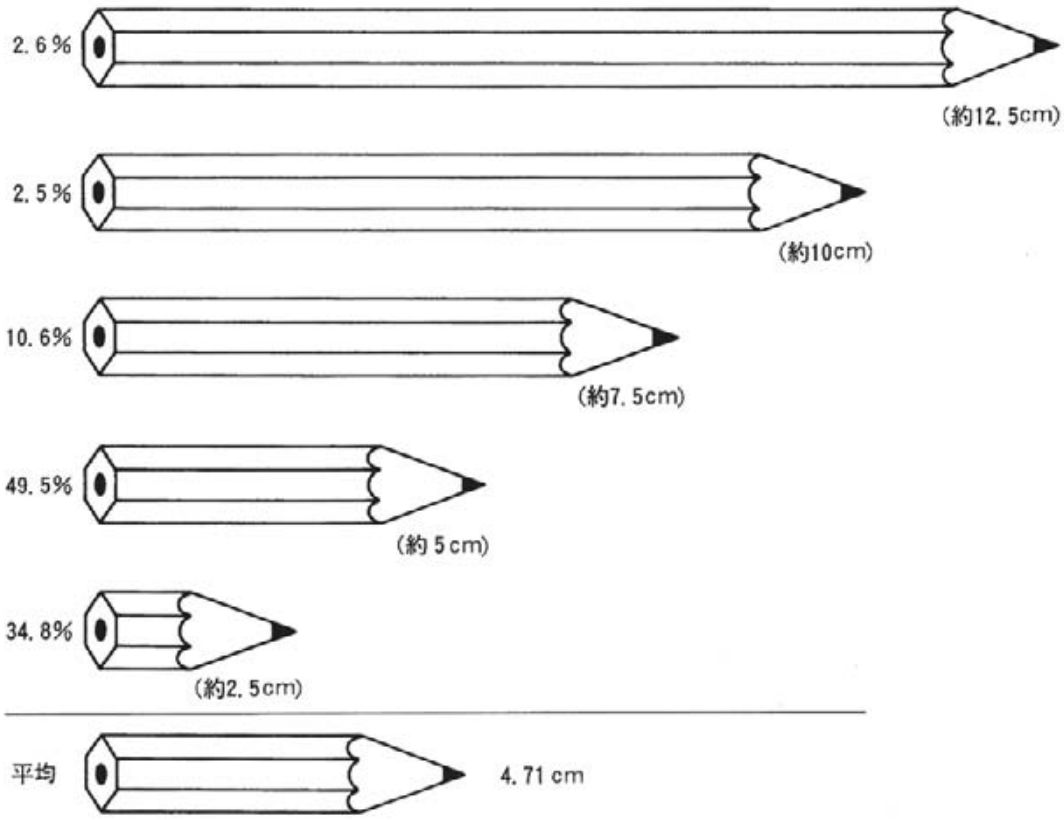


図６　鉛筆を取り替える長さ × 学年・男女

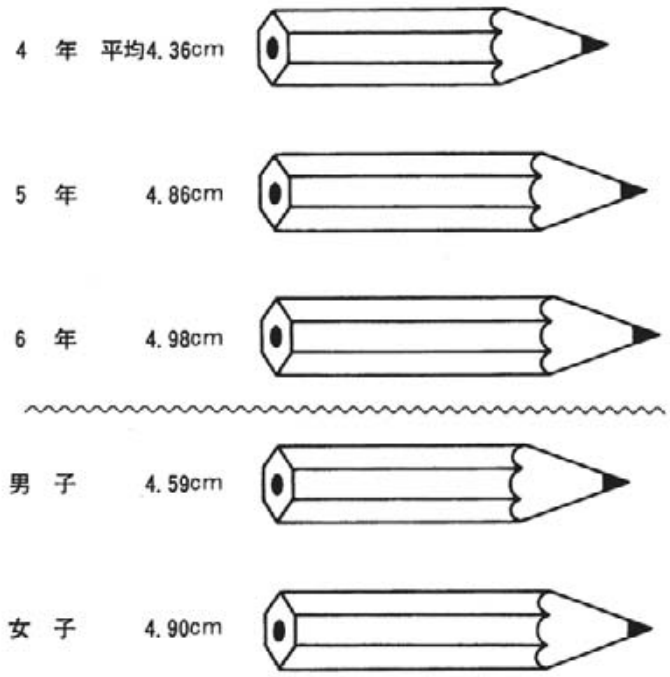
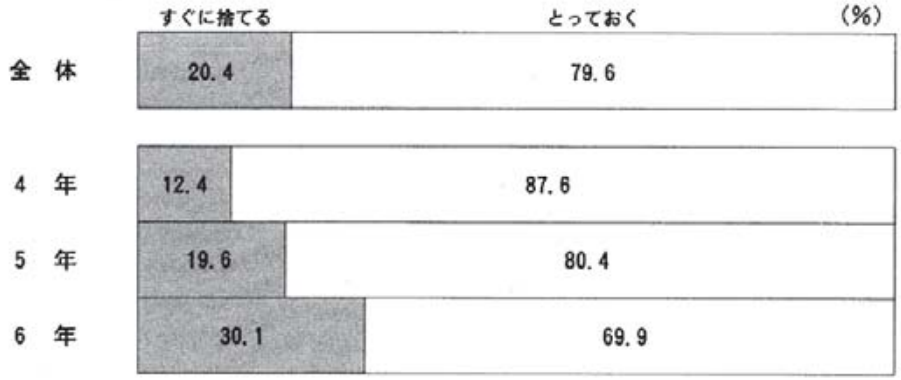


図７　古い鉛筆の処理

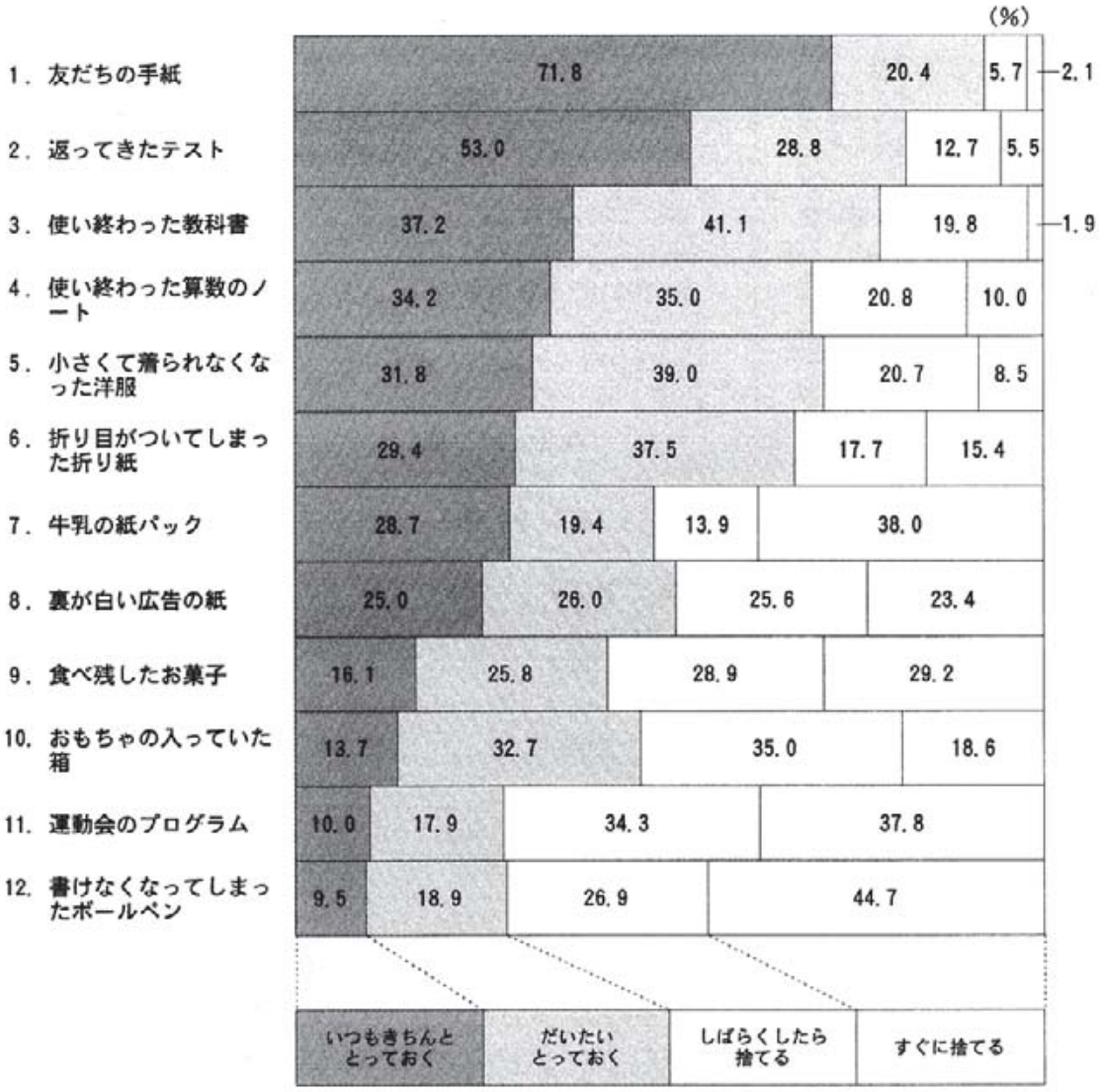


●身のまわりの物)))

ここからは、もう少し子どもたちのモノの範囲を広げて、使い終わった後で、どうしているかをたずね、本章のまとめとしたい。

図8は、子どもたちの身近にある物について、用が済んだ後で捨てるかとっておくかをたずねたもので、「いつもきちんととっておく」と答えた割合の高かった順に整理して並べてある。すなわち、子どもたちにとって大切な物の順に並んでいる。1位は「友だちの手紙」で、72%の子どもが「いつもきちんととっておく」と答えている。友だちの心の綴られたモノは、すぐには捨てられないのだろう。2位には、「返ってきたテスト」の53%が続いている。半数を超えているのは、この

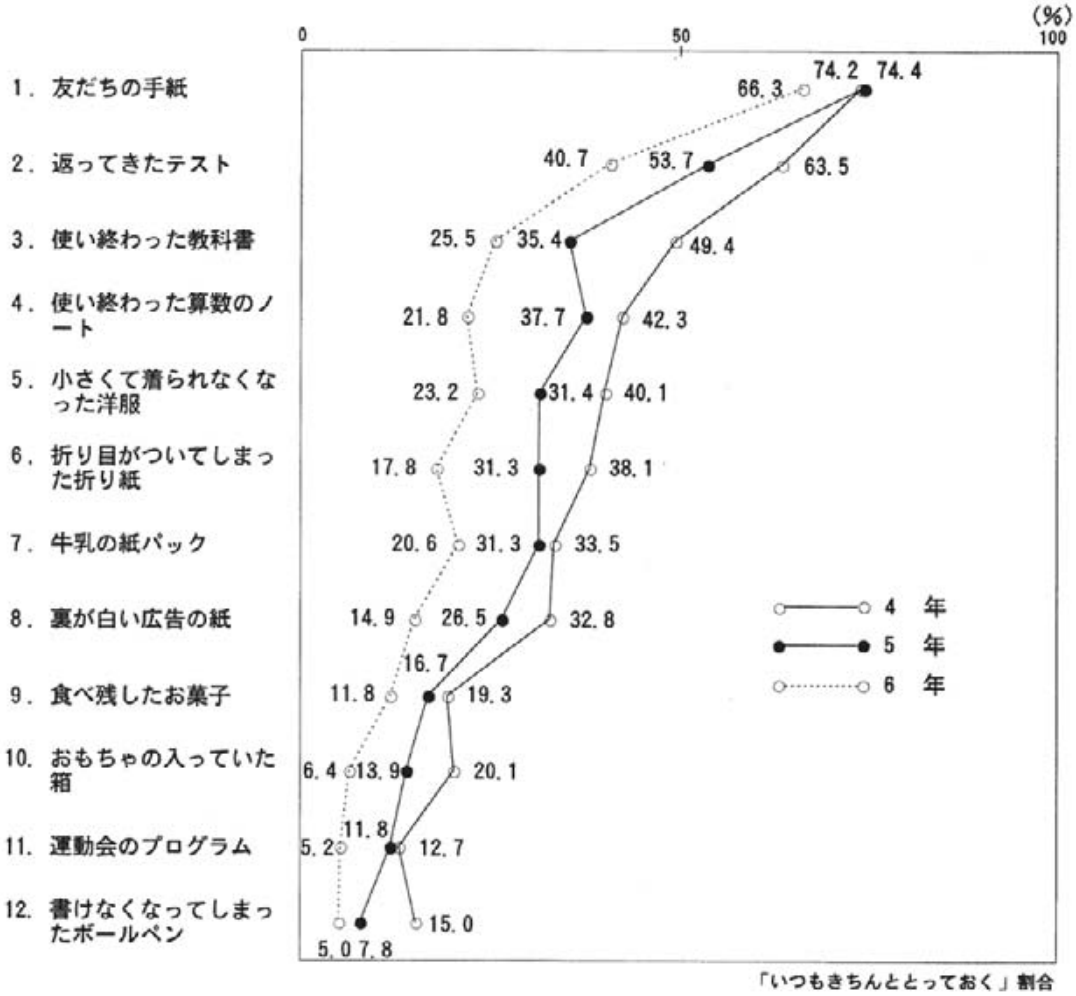
図8　いろいろな物の処理



2項目で、あとは30%台にまで落ちている。ここで注目したいのは、7番目以下の項目である。つまり、「捨てる」と答えた子どもがおよそ5割か、それ以上の項目である。7番の「牛乳の紙パック」は、冒頭のリサイクル運動の代表的なモノである。また、8番の「裏が白い広告の紙」や、10番の「おもちゃの入っていた箱」なども、再利用を考えたらうってつけの品物である。広告の紙はメモ用紙に、箱については整理箱に、それぞれ流用していた時代があり、昔の人はよく押し入れにいろいろな物をとっておいたものだが、その代表といえる品々である。今の子どもたちの感覚では、おおむね半数以上の子どもが、それらの物を捨ててしまうと言っている。

図9は、図8の学年別のデータであるが、学年差が実にはっきりしている。学年が上がればリサイクルについて考えるようになるのは事実であっても、実際の行動としては、学年が上の子どものほうが、次々に処理してしまっているのは、今まで通してみてきたデータからも明らかである。

図9　いろいろな物の処理 × 学年



「いつもきちんととっておく」割合

2. もったいない感覚

●もったいない物)))

この章では、今の社会でみられる様々な光景を子どもたちがどう捉えているかについてみたデータを紹介する。

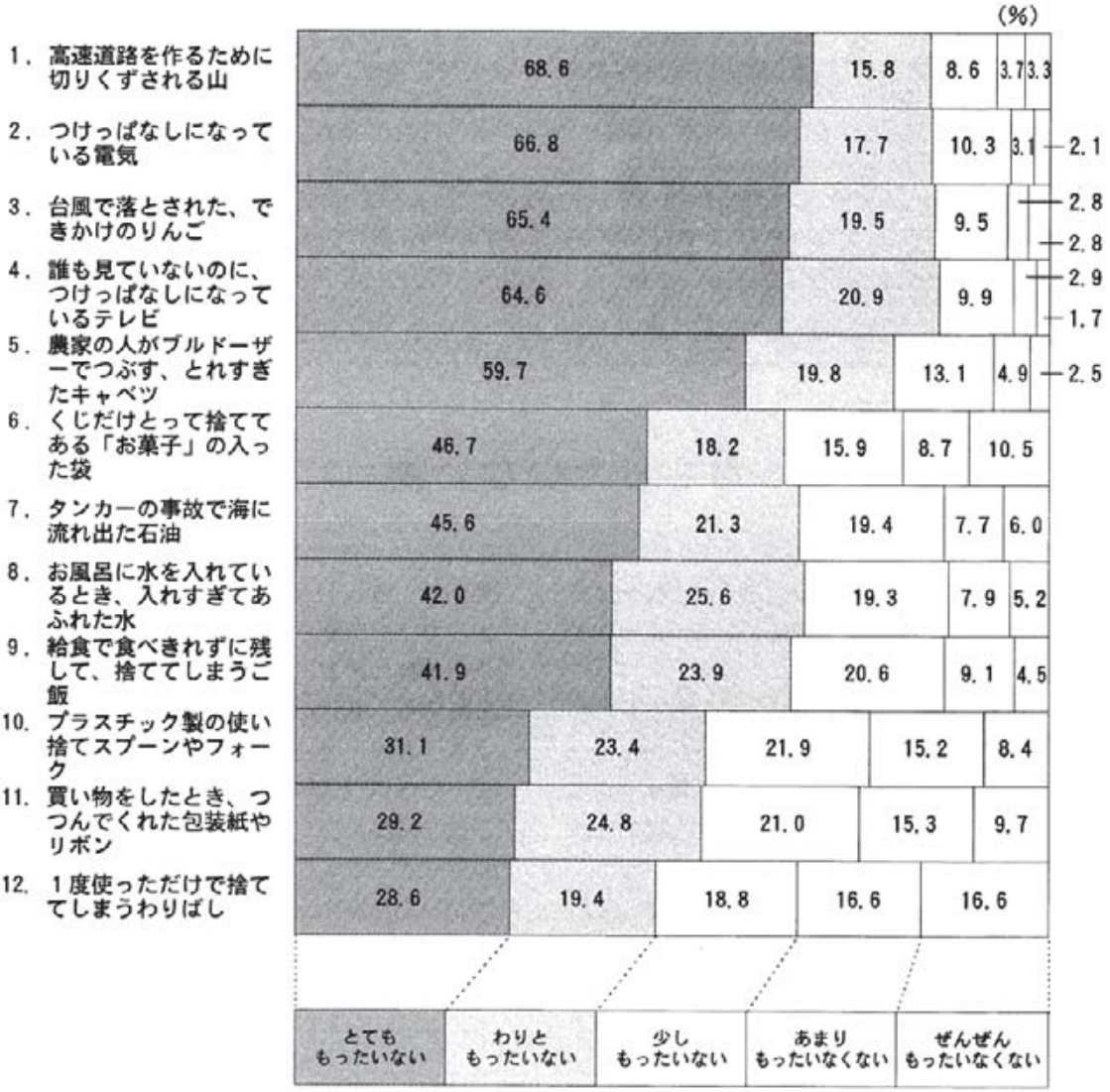
まず図10である。図10は、子どもたちにどのくらい「もったいない」と思うかをたずねたものだが、子どもたちが実際に体験できる事象の他に、テレビなどを通じて間接的に体験できる事象も含めてある。「もったいない」と思う気持ちが強い順に整理している。

社会のニュースとして、子どもたちに捉えられるであろう事象が上位に目につく。1番の「高速道路を作るために切りくずされる山」を見て、「とてももったいない」と思った子どもは69%、「わりともったいない」と思った子まで含めると実に8割を超える。自然がつくり出した雄大な風景が、人の手によってつくり変えられていく。その便利さを求める裏にある、「失われていくものに対する気持ち」が出ているのであろう。また、3番の「台風で落とされた、できかけのりんご」には、「とてももったいない」と感じた子は65%にものぼり、5番の「農家の人がブルドーザーでつぶす、とれすぎたキャベツ」についても60%と、多くの子どもたちがもったいなさを感じている。いずれの項目も、農家の人たちの苦労を思いやる気持ちも含まれているのだろうし、好ましい姿のようにも思える。しかし、同じ農産物でも、9番のような「給食で食べきれずに残して、捨ててしまうご飯」については、「とてももったいな

い」と思っている子どもが42%と、決して多くはない。同じ食品でも、日常的にいつもあるものには、無関心になるのだろうか。

身近な生活の中で、「もったいない感覚」の強いものは、2番の「つけっぱなしになっている電気」で、「とてももったいない」と思っている子が67%になっているのをはじめ、4番の「誰も見ていないのに、つけっぱなしになっているテレビ」が同じく65%と、家庭内での「もったいなさ」について感じている部分が高い。これは、先にあげた社会のニュースでしか見聞できない、自分から遠い所のこととは違って、いずれもスイッチ1つで解決できる問題である。この2つの割合が高いのは、子どもたちの「省エネ」意識というよりも、いずれも家庭内での対応であるこ

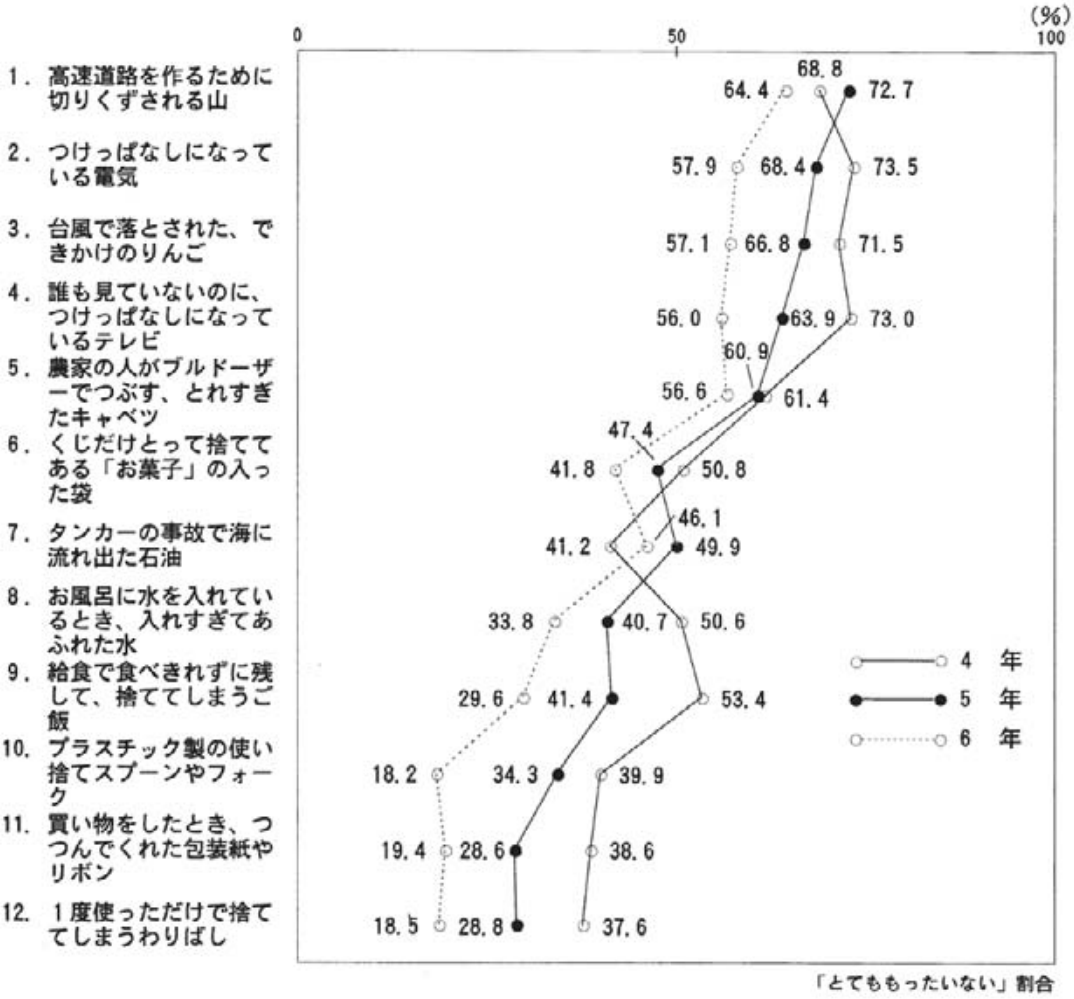
図10　もったいないと思う程度



とから、家庭でのしつけの問題に起因するものであることが推測される。家庭での様子については、次章を参照されたい。

前章同様、図11には、先の図10についての学年別のデータを掲載した。やはり、同じように学年ごとに差を認めることができる。6年生のほうが4年生と比べて、「もったいない」と思う感覚は低い。しかし、項目間の差をよくみると、1「山」や、3「りんご」、5「キャベツ」、そして7「石油」という社会のニュースの項目よりも、4「テレビ」や、9「給食」など、自分の生活に直接かかわっている項目についての学年差が大きいことに気づく。実生活でふれるモノのほうが学年の上昇と共に、「もったいない感覚」が失われていくようである。

図11　もったいないと思う程度 × 学年



●生活の中で)))

終わりに、実際の生活場面の中で、子どもたちが過剰なモノにどのように対応しようとしているか、まとめていくことにしたい。

図12から図16までは、「もしも○○であったら、どうしますか」の形でたずねた結果である。

図12は、レストランでハンバーグを残した場合の対応の仕方である。そのまま残してしまうのは、さすがにもったいないと思ったか、10％と少ない。「無理して食べる」と答えた子も37％と多いが、半分以上の子は、「一緒に行った人にあげる」であった。学年差については、学年が上がるにつれて、自分で無理して食べるくらいなら、人にあげてしまうか、そのまま残してしまうというように、自分に負担のかからないようにする傾向にある。

図13は、使えるカンペンがあるときに、お気に入りのカンペンを友だちからプレゼントされたという設定での対応である。これについても、お気に入りをもらったからといって、「今まで使っていたカンペンをすぐに捨ててしまう」という子は２％と少ないが、それ以外の対応は、ほぼ２分されている。「新しいのを使う」が46％、「今までのを使う」が52％である。しかし、ここでは前出のハンバーグの項目よりも学年による差が大きい。４年生では、36％の子どもが新しいカンペンに手を出しているが、６年生では、55％の子どもたちが、新しいほうのカンペンを使うと答えている。

図14と**図15**は、それぞれのモノを友だちの家に忘れてきたらどうするかをたずねた結果であるが、ハンカチにしてもシャープペンシルにしても、対応の仕方はほぼ同じである。いずれの場合も「すぐ、友だちの家に電話して確かめる」よりも、「次の日になって、友だちに学校で聞く」子どもの割合が上回っている。わざわざ電話するほど「もったいない」「早く取り戻さなければ」の感覚がなく、次の日に学校で会えるのだから一応聞いてみるか、という子が多いのである。

図16は、今までの項目と多少、趣を異にしている。マンガの本を買ったのに、店に本を忘れてしまったときの対応である。ほとんどの子は、店に行って店の人にその旨を伝えるということだが、６％の子どもは、店の人に言わず、また店にも行かずに、あきらめている。読みたくて買ったはずのマンガであっても、こういう対応ができるものなのだろうか。

こうしてみてくると、子どもたちは「もったいない」と感じないわけではないが、処理や対応がややめんどうになると、あっさりと代用品を用意したり、そのまま放置する傾向があるようである。

図12　ハンバーグが残ったら……

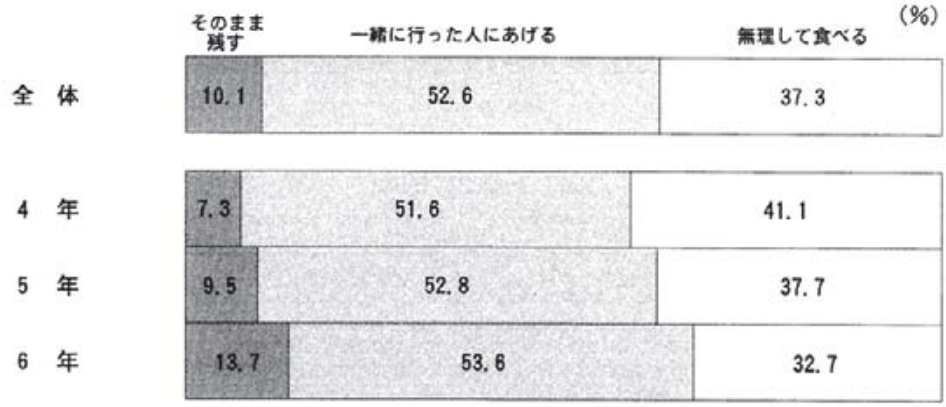


図13　気に入ったカンペンをプレゼントされたら……

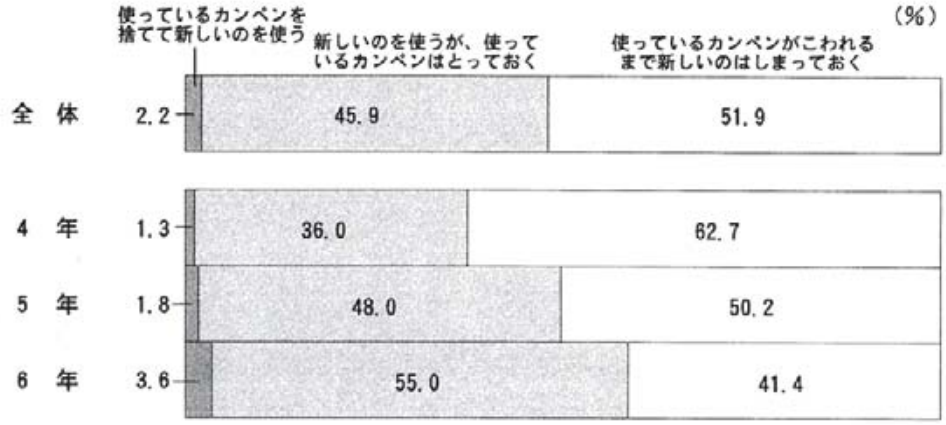


図14　ハンカチを友だちの家に忘れたら……

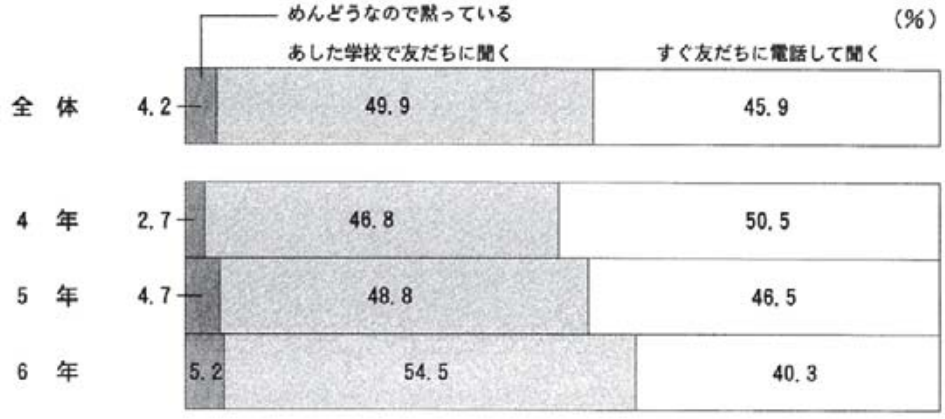


図15　シャープペンシルを友だちの家に忘れたら……

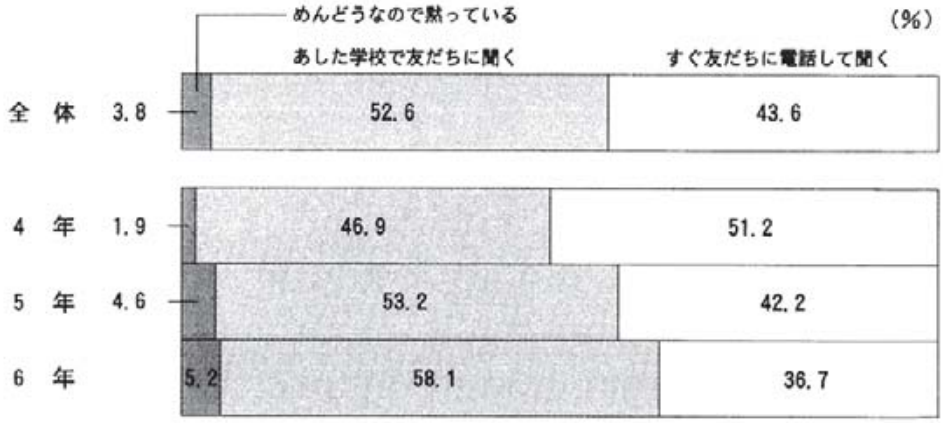


図16　買ったマンガ本を店に忘れてきたら……

3. 金銭にも恵まれている子どもたち

●金銭的にリッチな小学生)))

まず**表1**は、子どもたちの1か月のおこづかいの額を示している。4年生は500円以下が46%と半分近くであるが、5年生は31%、6年生は11%と学年が上がるにしたがい、1か月のおこづかいが500円以下である子は減少している。しかし、全体では30%の子がこの額の範囲に属していることがわかる。また、501〜1,000円の範囲の子は、全体の41%と最も多く、5年生で41%、6年生では52%と半数を超えており、小学校高学年の1か月のおこづかいの額は、この範囲に集中していることがうかがえる。

また、1,001円以上の子も全体の29%に達しており、6年生の37%がこの範囲に属している。しかも、2,001円以上という子も6年生では13%にも及んでおり、今どきの小学生で1か月におこづかいを2,000円以上もらっている子は、そう珍しくもないようである。以前関連するレポートで、小学生のおこづかいの好ましい額をたずねられた折、1年生は100円、2年生200円、3年生300円〜6年生600円を基準に、多くても1,000円以内におさえておくことが好ましいと指摘したのだが、この調査結果からは時の流れを大きく感じないわけにはいかない。豊かな社会の反映か、物価高の影響なのかはわからないが、かなり高額なおこづかいをもらう子どもたちがふえてきている。

こうした背景を裏づける結果として、1か月のおこづかいの平均を示した**表2**をご覧い

ただこう。今回の調査では、1か月に何千円ものおこづかいをもらっている子がいたため、これまでの「小学生ナウ」のデータよりも少々金額が多めとなって表れており、4年生で平均1,000円、5年生でおよそ1,230円、6年生でおよそ1,310円、全体の平均で1,180円という結果になった。また、男子のほうが女子よりもやや多めの額であることがわかる。

次に、貯金の額も紹介しておこう（**表3**）。子どもたちは、親のボーナスのときやクリスマス、誕生日、そしてお正月のお年玉というように、月々のおこづかい以外に、年間かなりの高額な臨時収入を得ている。したがって数万円は貯金しているだろうと予想はしてい

表1　1か月のおこづかいの額

（%）

	4　年	5　年	6　年	全　体
0～500円	46.0	30.7	10.7	30.0
501～1000円	30.7	40.7	52.3	41.0
1001～1500円	10.8	9.7	13.4	11.3
1501～2000円	5.2	8.9	10.8	8.3
2001円以上	7.3	10.0	12.8	9.4

表2　1か月のおこづかいの平均額

4　年	5　年	6　年	男　子	女　子	全　体
1000円	1234円	1313円	1206円	1144円	1180円

たが、4年生で平均4万1千円、5年生で5万5千円、6年生で4万9千円、全体の平均は4万8千円という結果には少々驚かされる。親が金欠病のとき、小学生のわが子に頭を下げてお金を借りるという話はよく耳にするが、あながち嘘ではないようで、リッチな小学生が登場してきているのかもしれない。また、調査データからは高学年の女子のほうが男子よりも多く貯めていて、無駄遣いをしないで貯金にまわす、しっかり者の女子の姿がうかがい知れる。

表3　現在のおよその貯金の額（平均）

（万円）

	男　子	女　子	全　体
4　年	4.2	3.8	4.1
5　年	5.3	5.8	5.5
6　年	4.6	5.1	4.9
全　体	4.6	5.0	4.8

●お金に対する感覚)))

このように金銭的にかなり豊かな小学生が、お金に対してどのような感覚をもっているのか、1つの例を紹介しておくことにしよう。

表4は、お金を落としても、もったいないと思わない金額をたずねた結果であるが、全体の38%の子は、1～5円までをもったいないとは思わないと答えており、以下6～10円までが22%、11～50円までが12%、51～100円までが14%、101～500円までが9%、501円以上でももったいないとは思わない子が5%にも及んでいる。

こうしたあまりもったいないと思わない額は、学年が上がるにしたがいふえており（4年生の平均54円、5年生108円、6年生132円)、しかも男子より女子のほうが顕著である（男子の平均102円、女子109円)。

私たちおとなでも100円玉や500円玉を落としてしまったことに気づけば、少しはもったいないと思うはずなのに、1か月1,000円程度のおこづかいしかもらっていない小学生の1～2割が100円や500円を落としても、もったいないとは思わないという感覚が少々気がかりである。そう答えた子どもたちの親の物やお金に対するしつけや教育は、一体どうなっているのか調べてみたい気がする。

表4　落としても、もったいないと思わない金額

(%)

	4年	5年	6年	男子	女子	全体
1～5円	48.8	37.7	27.9	41.8	34.1	38.3
6～10円	25.0	19.0	22.6	22.3	22.1	22.3
11～50円	8.1	11.8	13.7	10.3	12.4	11.5
51～100円	10.6	15.4	16.7	13.0	15.9	14.3
101～500円	5.6	10.8	13.5	7.9	11.2	9.1
501円以上	1.9	5.3	5.6	4.7	4.3	4.5
平均金額	54円	108円	132円	102円	109円	104円

4. 落とし物への対応

●落とし物に知らん顔)))

金銭面ではかなり豊かそうな様子が明らかになってきた子どもたちの、学校生活の場面に話を切り換えることにしよう。**図17**は、担任の先生がクラスのみんなの前で、自分の落とし物を「誰のですか」と紹介したときの対応についてたずねたものである。図によれば、「その場で、すぐ手をあげて返してもらう」割合が高いものは、「折りたたみの傘」(88%)、「お母さんが作ってくれた手袋」(87%)、「新しいセーター」(87%)、「半分使った消しゴム」(80%)、「ビニールの傘」(76%)、「半分使った鉛筆」(75%)の順である。また、「そのときは黙っていて、後で先生に言いにいく」割合が高いものは、「学校に持ってきてはいけないはずの腕時計」(54%)、「下着(シャツ)」(46%)、「古くて着たくないセーター」(44%)、「ゴムののびたソックス」(42%)の順となっており、子どもたちの微妙な心理状態がうかがえる結果である。

最後に、「知らん顔をして」自分の物でないことにしてしまう割合が最も高いものは、「ゴムののびたソックス」(21%)、「読み終わった雑誌」(20%)、「下着(シャツ)」(17%)、「古くて着たくないセーター」(16%)、以下、「半分使った鉛筆」(12%)、「半分使った消しゴム」(9%)、「学校に持ってきてはいけないはずの腕時計」(8%)となっている。

こうした「知らん顔」をしてしまう傾向が強いためと、名前が記入していないことも加わって、学校では鉛筆や消しゴムをはじめと

する多くの学用品が、落とし物箱の中に眠ることになり、学期末には学校中もしくはクラス単位で、まだ使える多くの学用品が処分される結果となる。ときには、新しいジャンパーやセーター、靴や傘などもあり、本当に捨ててしまっていいのかと悩む教師も多く、子どもはもちろん、一体親はこのような物を探さないのであろうかと疑問に思う。こうした物に対するしつけや、もったいないと思う感覚を、いくら豊かな時代でもないがしろに

図17　自分の落とし物に対する対応の仕方

していいわけはないであろう。さらに、表5が示すように、自分の落とし物を「知らん顔をする」割合は学年が上がるにしたがい高くなり、女子は比較的値段の安い物は知らん顔をするが、高い物は男子よりも知らん顔をする割合が低いことも見いだされる。

表5　自分の落とし物を「知らん顔をする」割合

(%)

	4　年	5　年	6　年	男　子	女　子
1．ゴムののびたソックス	14.0	18.8	29.7	18.4	23.4
2．読み終わった雑誌	15.4	19.7	24.3	21.0	18.1
3．下着（シャツ）	11.0	16.8	22.8	14.6	19.5
4．古くて着たくないセーター	11.8	18.3	19.7	17.9	14.6
5．半分使った鉛筆	6.8	13.0	16.7	11.2	13.0
6．半分使った消しゴム	6.6	9.7	12.2	8.8	10.1
7．腕時計（持ってきてはいけないはずの）	9.8	7.2	5.6	8.9	5.9
8．少しよごれたハンカチ	5.5	8.6	8.1	8.7	5.5
9．ビニールの傘	4.4	7.5	10.3	7.1	7.5
10．お母さんが作ってくれた手袋	2.9	2.6	2.7	3.6	1.6
11．折りたたみの傘	2.7	2.6	2.5	3.4	1.6
12．新しいセーター	1.8	3.1	2.2	3.0	1.3

5. 母親のしつけをめぐって

●便利さや合理性を優先する子どもたち)))

まず、今回の調査対象の子どもたちの、物に対する簡単なプロフィールをまとめておくことにしよう。**図18**は、自己像をたずねた結果である。「自分は物を大切にするほうだ」と答えた子は、「とても＋わりと」そう思うを含めて51%で、約半分の子が自分は物を大切にする子だとしている。反対に、「あまり＋ぜんぜん」そう思わない子は21%と、約2割の子が物を大切にするほうでないとしている。

次に、整理整頓についてみると、「よくできるほうだ」と答えた子は33%で、そう思わない子の43%を10%も下回っている。また、「自分のことは自分でするほうだ」と答えた子は47%だが、一方、そう思わないと答えた子は23%にも及んでいる。つまり、2～3割の子は、物を大切にしたり、整理整頓をしたり、自分のことをするのが苦手であると思っていることがわかる。

図19は、物や食べ物に対する考え方を示したものである。基本的には、物を大切にする傾向が示されているものの、「不便な物をがまんして使うより、新しい物を買って便利に使うほうがいい」に賛成と答えた子は47%、「上等のセーターを何年も着るより、安い物でも毎年新しいセーターを着ているほうがいい」が31%、「出されたおかずを全部食べてふとってしまうより、残したほうがいい」が29%、「残ったおかずはまずいので、思いきって捨ててしまったほうがいい」が18%と、

無駄をなくしたり、工夫をしたり、がまんしたりするよりも、便利さや合理性を優先する子が少なくないことがわかる。

そこで、今度は家庭内でのしつけを中心にみていくことにしよう。

図20は、家で物を大切にする人をたずねたものである。「とても大切にしている」割合でみると、「おじいさん・おばあさん」(71%)、次いで「お母さん」(63%)、「お父さん」(50%)、そして「自分」(35%) の順である。

おじいさん・おばあさんのように、今よりももっと物やお金を大切にしていた時代に育った人の生活の様子を、子どもたちがよく知っていることがわかる結果である。また、お母さんは、「とても＋わりと」を含めて、物を大切にしていると答えた子は95%となっており、母親の面目躍如といったところであろう。

図18　自分はどんな子か

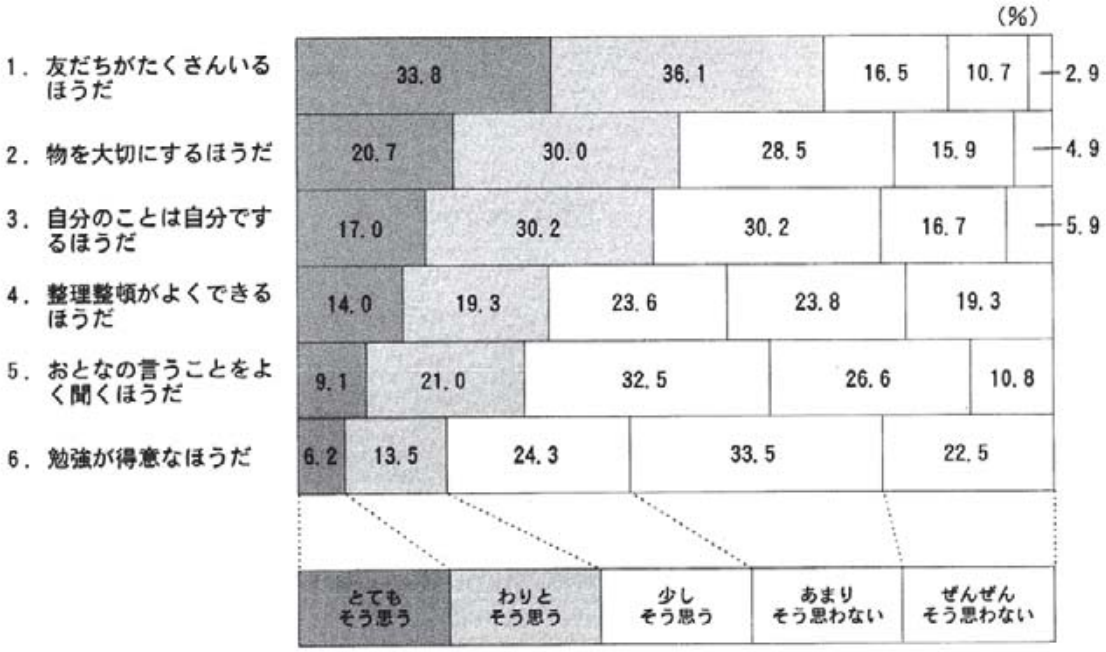


図19　物や食べ物に対する考え方

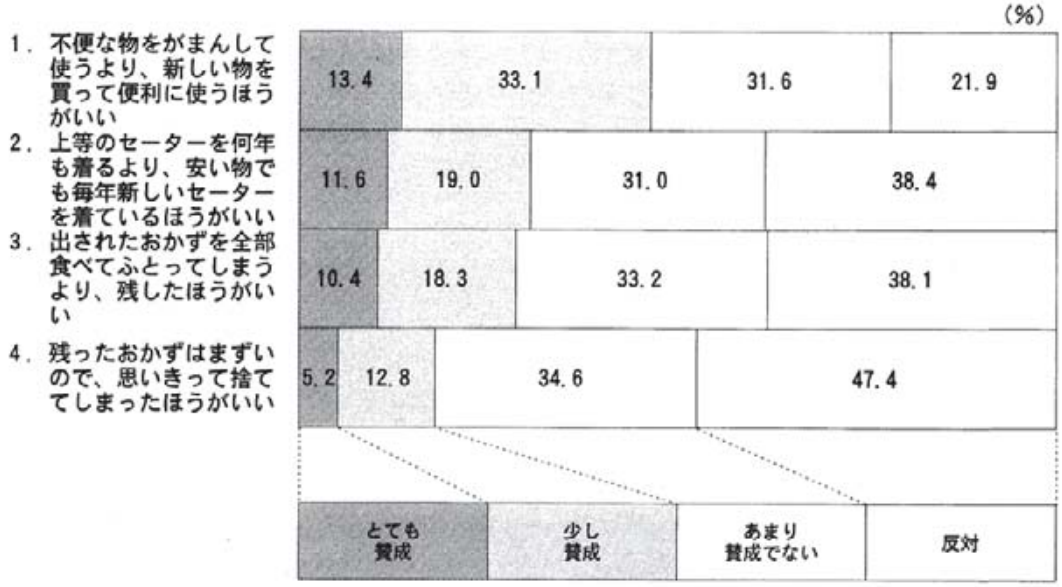
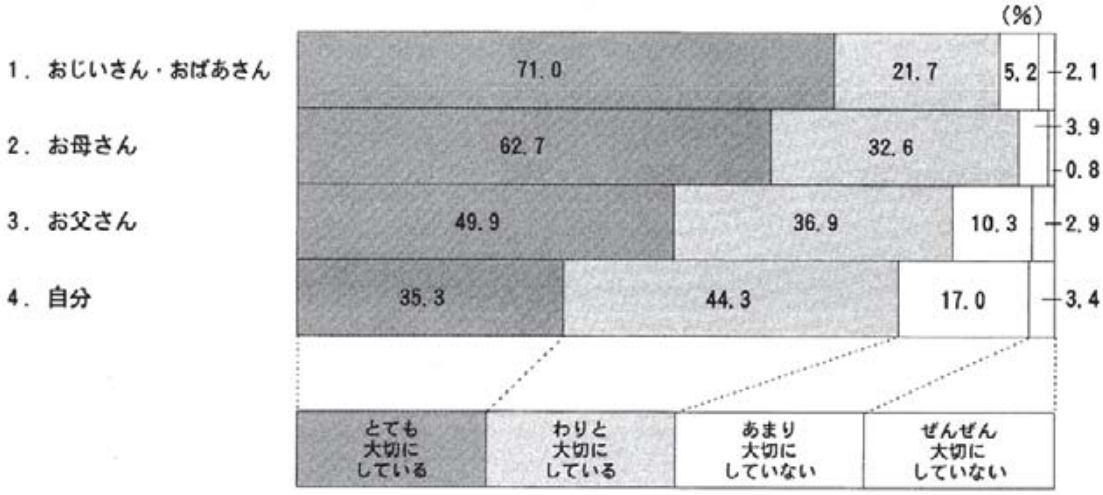


図20　家で物を大切にする人

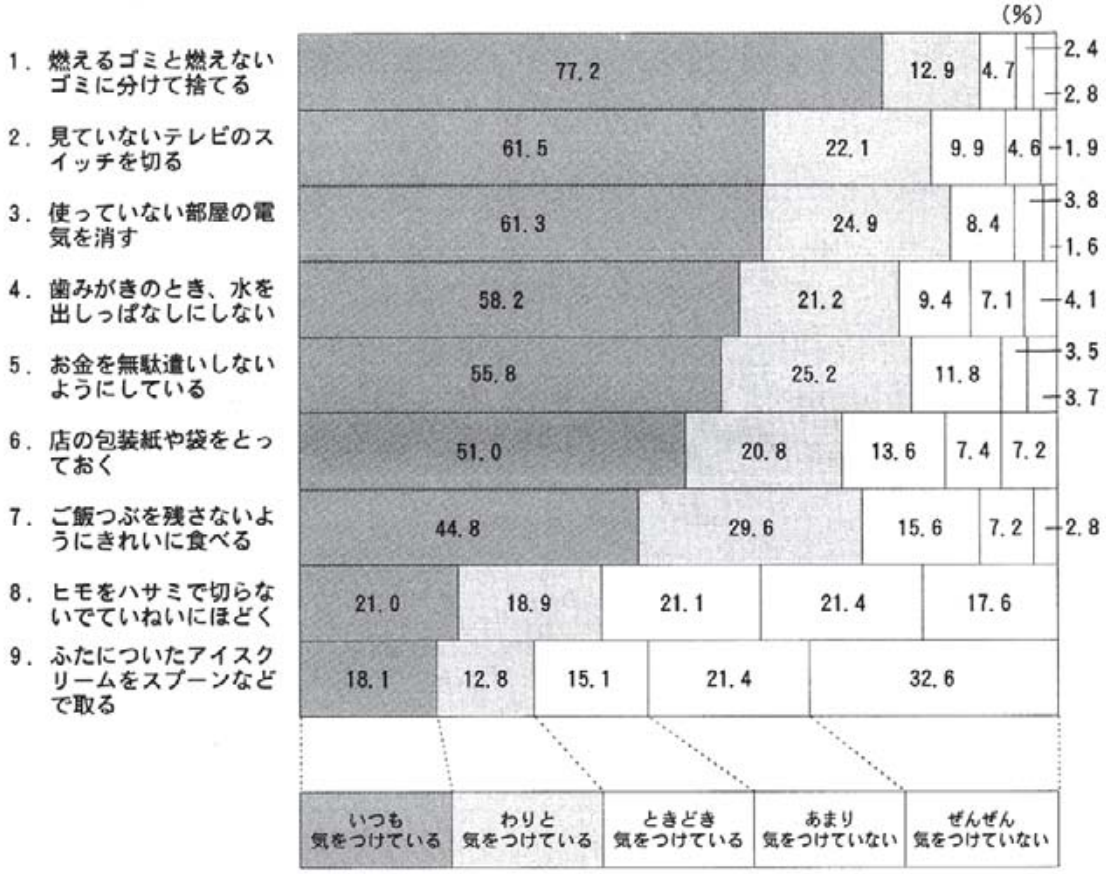


●母親のしつけ)))

最後に、子どもからこれまで高い評価を得ている母親が、物やお金に対してどのように注意や教育をしているのかをみていき、本章のまとめとしたい。

まず、**図21**をご覧いただこう。これは自分の母親が、ふだんどんなことに気をつけて生活しているかをたずねたものである。「いつも＋わりと」気をつけている割合でみていくと、「燃えるゴミと燃えないゴミに分けて捨てる」(90%) を筆頭に、「使っていない部屋の電気を消す」(86%)、「見ていないテレビのスイッチを切る」(84%)、「お金を無駄遣いしないようにしている」(81%)、「歯みがきのとき、水を出しっぱなしにしない」(79%)、「ご飯つぶを残さないようにきれいに食べる」(74%)、「店の包装紙や袋をとっておく」(72%) の順となっており、今回の調査対象となった子どもたちの母親が、かなり高い割合で、日常生活の無駄を省くように気をつけている姿が読み取れる。しかし、「いつも」気をつけている割合でみた場合に、「お金を無駄遣いしないようにしている」(56

図21　母親が気をつけていること

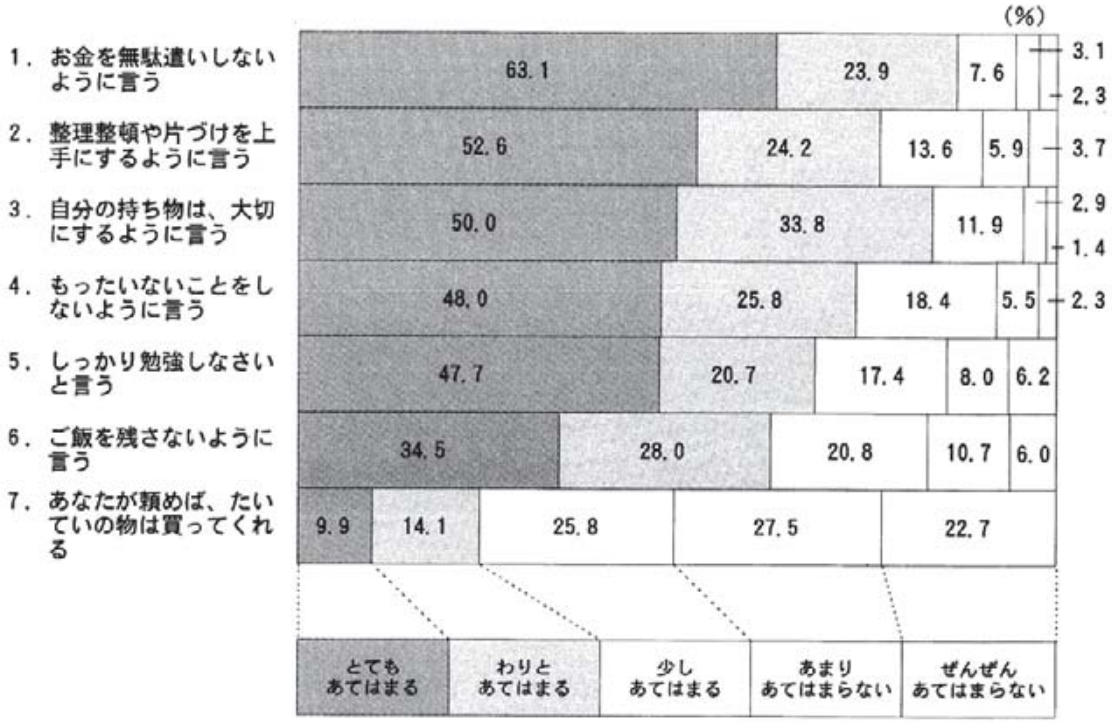


%)、「ご飯つぶを残さないようにきれいに食べる」(45%) といったような、日本の古くからの美徳とされていた項目の割合が、意外に低いのが少々気がかりであり、先の章で述べた子どもの金銭感覚や食べ物や持ち物を大切にしない傾向と、少なからぬ関連がありそうだ。

そこで、今度は子どもたちにどんなことを注意したり、気をつけたりしているのかをみてみよう。**図22**は、「母親が自分にどんなことをよく言っているか」をたずねたものである。「とても+わりと」あてはまる割合でみていくと、「お金を無駄遣いしないように言う」(87%) をトップに、「自分の持ち物は、大切にするように言う」(84%)、「整理整頓や片づけを上手にするように言う」(77%)、「もったいないことをしないように言う」(74%)、「しっかり勉強しなさいと言う」(68%)、「ご飯を残さないように言う」(63%) の順となっており、持ち物や食べ物、お金を大切にするように言っていることがわかる。しかしここでも、「とても」あてはまる割合でみると、「ご飯を残さないように言う」(35%)、「もったいないことをしないように言う」(48%) と、5割を切る数値となっており、母親のもったいない感覚も奥のほうで崩れはじめていることがわかる。

最後に、**図23**をご覧いただこう。これは、

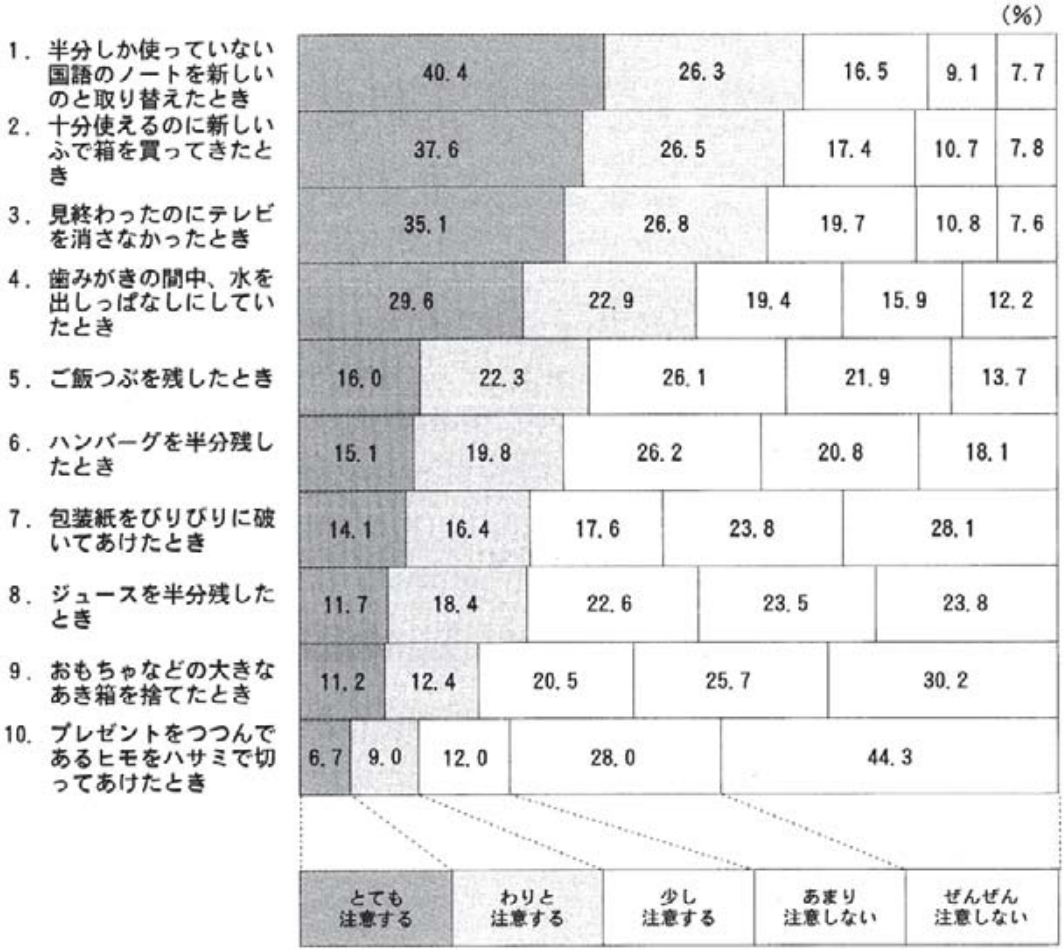
図22　自分の母親にあてはまること



自分が次のようなことをしたら、どのくらい注意されるかをたずねたものである。これも「とても＋わりと」注意する割合でみていくことにしよう。図から順に、比較的よく注意されると思っているのは、「半分しか使っていない国語のノートを新しいのと取り替えたとき」(67%)、「十分使えるのに新しいふで箱を買ってきたとき」(64%)、「見終わったのにテレビを消さなかったとき」(62%)、「歯みがきの間中、水を出しっぱなしにしていたとき」(53%) の4項目で、あとは全て5割を割る値となっている。例えば、「ご飯つぶを残したとき」(38%)、「包装紙をびりびりに破いてあけたとき」(31%)、「ハンバーグを半分残したとき」(35%)、「ジュースを半分残したとき」(30%) といった具合で、特に食べ物に対するしつけや注意がかなり甘い気がしないでもない。飽食の時代、グルメ化の傾向がおとなのみならず、子どもたちのしつけの面にも大きな影響を及ぼしていることがうかがえよう。

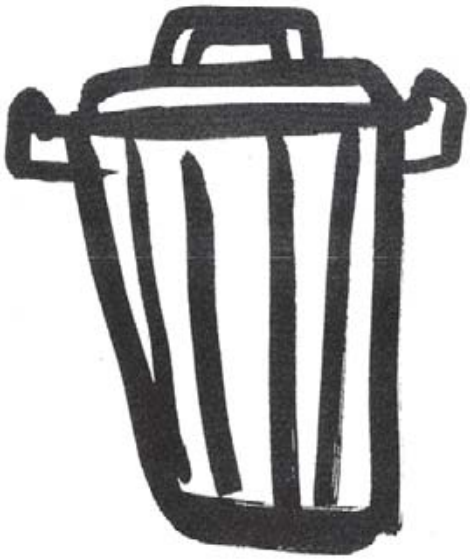
小学生の母親には、時代の軽い風潮にまどわされず、子どもにもっと食べ物や持ち物を大切にするように、きびしくしつけてほしい。食べ物を残したり、ぜいたくや無駄をするのはおとなになってからでも遅くないのではなかろうか。

図23　母親が自分に注意すると思うこと



〔対 談〕

モノ社会と子どもたち



●対談

モノ社会と

無藤　隆氏
（お茶の水女子大学助教授）

深谷昌志氏
（静岡大学教授）

〔はじめに〕

同じ研究分野だと、大学院生くらいでも優秀な研究者の発表は注目しているので、おおよその動向はわかる。しかし、隣接領域だとどういう新しい芽が育っているのかがわからない。

無藤氏の研究に初めて接したのは、東京大学出版会から出された、テレビについての著作だった。アメリカの動向をこまかく追いながら、緻密に論理を組み立てているあたりに研究者としての質のよさを感じた。それから数年を経て、今回の対談をきっかけにご本人とお会いすることができた次第である。

（深谷昌志）

モノを欲しがらなくなった子どもたち

深谷　今の子どもたちは豊かな社会の中で育っています。しかし、子どもたちはそれを当たり前だと思っている。そうした中で最近の子どもたちが変わってきたということが、いろいろなところで論議されています。こうした子どもの変化を先生はどう思われますか。特に幼児の研究をなさっているお立場からいかがでしょうか。

無藤　幼児から小学生くらいを考えますと、2つの傾向がみられます。1つには欲というものがなくなってモノを痛切に欲しがらなくなったということ。もう1つは同じようなゲームをたくさん集めるということです。一見矛盾しているようですが、この2つは根本的に欲が浅いのではないかという気がします。商品との関わり方が変わってきたというのが実感ですね。

深谷　例えば先生の子どもの頃と比較して、どの辺りがいちばん無欲になっているとお考えですか。

無藤　私が小学生の頃は貧しかったですから、友だちの家にテレビが入れば無性に自分の家にも欲しいと思いました。それから、おとなになったら好きなときにラーメンを食べたいとか、ケーキをたらふく食べたいとか、欲が深かった。もちろんそれらは単純な欲求でしたが。

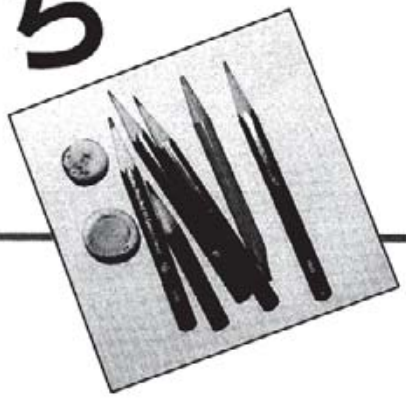
深谷　でも見方によると、その頃の子どもたちは夢がありましたね。

無藤　そうですね。それ自体はたいしたことはないけれど、それが象徴する何か未来が開けてくるような感覚はありましたね。

深谷　でも今の子どもたちには、そういった単純な夢すらもてなくなっている。

無藤　3～4歳児はともかく、いちばん変わったのは小学生です。例えばプレゼントなど、贈るほうの親が困っている。もちろん子どもに聞けば、新しい「スーパーマリオ」が欲しいなどというのでしょうが、親からみれ

子どもたち



ばゲームソフトなんてどれも同じようなものです。子どもによっては全く欲しがらない子もいますし、お金を貰って貯金する子もいます。そういう欲望の乏しさと、一方ではゲームソフトを数多く欲しがる。ここで共通しているのは、強烈な満足感がないということです。また、満たされたときの感動が少ないのではないでしょうか。

深谷　不足感もない代わりに満足感ももてないということでしょうか。

無藤　そうですね。小さい頃から、感動するとか、忘れられないような体験が少ないということだと思います。

深谷　それは日本だけでしょうか。アメリカの子どもたちはどうでしょう。

無藤　少なくともアメリカの場合は階級差が大きいですから、下層階級の人たちと中流の人たちとは違いますね。アメリカの中流レベルと日本が同じ状況だと思います。

深谷　アメリカの場合には、日本のような形でどこの地域もおしなべて豊かだという社会機構になっていないですね。今でもかなり貧しい階級もあれば、考えられないような豊かな人もいますからね。日本はどこに行っても豊かになってしまった。

無藤　日本の特殊事情もあるのでしょうが、お互いに比較してもそんなに変わらない。ですから、もっと豊かになりたいという上昇意欲もそう強くないでしょうし、逆に低いほうをみても満足感はあまりないのでしょうね。

深谷　豊かな社会になってきたということと情報化ということがどう結びつくかということは別にして、日本の場合はたまたま豊かな社会と情報化が同時に動きましたね。

無藤　われわれが豊かになっていったときは、テレビとか電気洗濯機などの普及に象徴されるように、モノを買うという方向で豊かになっていったわけです。それが経済成長と一致したということがいえると思います。つまり、モノ中心の豊かさなんですね。

無藤　隆（むとう・たかし）**氏**

プロフィール

1946年生まれ。1972年東京大学教育学部教育心理学科卒業。1977年東京大学大学院教育学研究科博士課程中退。
現在お茶の水女子大学生活科学部助教授。主な著書『心理学とは何だろうか』(共著、新曜社)、『テレビと子どもの発達』(共著、東京大学出版会)、『発達心理学入門Ⅰ、Ⅱ』(共編著、東京大学出版会)、『生活科の心理学』(初教出版)、『子どもの生活における発達と学習』(ミネルヴァ書房)ほか。

無藤　隆氏

情報でモノの差異を求める

深谷　たぶんそれは、欧米の豊かさの感覚とは非常に違うだろうと思う。特にヨーロッパの人たちの豊かな家庭生活というと、もちろん居住スペースが広いこともあるでしょうが、家具も古いものが価値があるというように、電化製品が普及する以前に豊かさがあって、その後から情報化が入った。

無藤　そうですね。ヨーロッパの場合は19世紀頃に接した感覚が、そのまま生きているような社会だと思います。

深谷　当然そういう違いが、子どもたちにも影響を与えているのでしょうね。

無藤　日本の場合は、子どもの世界が趣味化してきたといったらいいのでしょうか。とにかく、おとなの世界でいう趣味をもつ年齢が下がってきているように感じるのです。それに気がついたのは10年ほど前ですが、おとながいうところのホビーをもっている時期が早くなった。いろいろな意味で趣味化が進んでいるのです。趣味化してくると単純にモノを買い集めるというのではなく、そのモノのどこが他のモノと比較していいとか、付加された価値を求めるわけです。もちろんお金がかかる部分もあります。例えばファミコンのゲームをたくさん集めるには、かなりの金額を必要とします。しかし必ずしもお金の問題だけではない。つまり、子どもの世界に情報の問題が入ってきたのです。単純にモノを集めるのではなく、同時にモノに付加された価値が大事になってくる。そうなると、どこがいいのかという知識をもっている子のほうが強い。子どもの間で競争するとき強さを発揮するわけです。同じモノでも、単に値段の高低ではなくて、情報によって価値が決まるのです。そのための情報集めにも熱心です。

深谷　ポジティブに評価すれば、もう子どもたちは単にモノを手にするという価値が下がってきて、自分の主体性で趣味をもとうとしているということかもしれませんね。

無藤　情報的な差異を求めるという、おとなの社会に限りなく近づいているといっていいのではないでしょうか。

深谷　例えばテレビ番組でも、アメリカでは子どもとおとなの文化はきちっと分かれていますね。日本の場合は、おとなと子どもの境目がまるでない。その意味では確かに子どもの世界は趣味化しているといえますね。うまくいけば個性化するし、否定的に捉えるとマスメディアの中に子どもが巻き込まれたともいえる。その辺の兼ね合いはどうでしょう。

無藤　その辺はゆれていて定まらないという感じがします。もちろん個性的にやっている子どももいるでしょうが、どちらかというとここ数年、子どもをターゲットにしたマスメディアが集中的に情報を流している。ゲームソフトなどは、それに乗せられている感じです。しかも、その年齢が年々下がってきているという印象をうけます。

深谷　日本の場合、マスメディアがハードから入ってきているということですが、具体的にはどういうことですか。

無藤　モノが先に売れるということです。テレビでもそうでしたし、テレビゲームもそうです。ワープロなども大して必要性がなくてもとにかく買う。それがだんだん使われていく形で進んできているわけです。そういう意味で使い方が遅れていたわけですが、最近はやっと追いついてきたという感じです。

深谷　といいますと、ガードをしないうちにテレビが入ってきてしまった。見方がどうのこうのという前にテレビが入ってきてしまっ

たということですね。

無藤　テレビの時代が続いて、次にテレビゲーム、ワープロ、コンピュータが入ってきた。とにかくモノが先にどんどん入ってきてしまった。そこで、使い方は与えられたものをともかく消費するという形をとるところから始まります。その後で、個人毎の独自な使い方が生まれつつあるというところではないでしょうか。

テレビCMの子どもへの影響

深谷　テレビと子どもとの関わりで、日本とアメリカの問題意識の違いというのはありますか。

無藤　いちばんの違いは暴力の問題だと思いますね。日本の社会でも暴力はありますが、普通の人間にとっては日常茶飯事というわけではありません。子どもの頃から暴力的で困るというケースもまれです。ですからテレビやマスコミが暴力を増大させているのではないかという声は一般的に低いわけです。

深谷　逆にアメリカでは暴力に対するコードはかなりきついですね。なぜあんなにナーバスになるのですか。

無藤　いろいろな事件が続くと、マスメディアが目の敵にされるのは、どこの国でも同じですね。アメリカの場合は他に全国ネットのメディアがありませんので、どうしてもテレビがやり玉にあがってしまう。

深谷　他にテレビと子どもとの関わりで、日本とアメリカとの問題意識の違いはありませんか。

無藤　共通なのはコマーシャルと性差別、これは今や世界的に共通の問題ですね。

深谷　コマーシャルというのは、どういう問題ですか。

無藤　子ども向けのコマーシャルはどのくらいが正当で、どのくらいが不当か、どの程度まで規制を入れるかということです。極端な例ですと、子ども向けの番組にはコマーシャルを入れてはいけないという動きもあるよう

です。コマーシャルだということが理解できない子どもに、商品を売りつけるのは問題だというのです。当然、日本でも消費者団体からの批判があります。

深谷　でも日本の場合は、コマーシャルのコードはそれほど厳しくはないようですが…。

無藤　それは日本のコマーシャルが比較的ソフトで、あまり露骨な売り込みをしないからだと思います。コマーシャル自体の格というか質も高い。それに日本人はとかく、コマーシャルに対して好意的ですね。

深谷　国民性もあるのでしょうが、確かにアメリカの場合は、競合商品なりライバル会社を正面から攻撃するコマーシャルが多いですね。ただ、アメリカは、おとなと子どもの番組をきっちり分けている感じがしますが、日本の場合は、その差がないようですね。

無藤　子ども向け番組とファミリーアワー、そしておとな向けに分けているのが世界的な風潮です。日本では垣根が低いように思います。例えばアニメーションの「サザエさん」なんか、幼児もおとなも一緒に楽しんでいます。こうした番組の幅の広さも日本の特徴なのかもしれません。

深谷　私たちはつい、世界中が豊かな情報化社会だと思い込んでしまいますが、ヨーロッパでは子どもの視聴時間が限られているし、その意味では日本の子どもたちが、いちばん豊かな情報化の環境に巻き込まれている感じがしますね。

無藤　情報量という点では日本とアメリカがいちばん多く、階級層を考慮すると日本がいちばん多いようです。

深谷　今さらテレビのない時代に戻るのは無理ですが、子どもの成長にとって、テレビの情報のメリット、デメリットをどのようにお考えですか。

無藤　テレビは世の中の知識を圧倒的に多く伝えてくれるわけで、これはプラス面です。一方、同時にそれが浅くて断片的だというマイナス面。いい面と悪い面、その両方があると思います。おとなだと自分なりに整理した

り体験に照らして判断したりすることができますが、子どもは断片的なまま受け入れてしまう。そこがいちばん問題です。テレビのもう1つの重大な効用は、家族関係を変えたということだと思います。情報化社会の1つの特徴は、すべての人が情報へのアクセスをできる方向へ進んでいることです。その中に子どもが入っている。ですから子どもが直接、情報を得ている。かつては情報を伝えるのは親とか学校でしたが、テレビの出現は、親の権威や学校教育を根本的に変えてしまいました。これはよいことだと評価する意見もありますし、困ったことだとする立場もあると思います。

情報化社会の恩恵をプラスに

深谷　もし、どちらかと問われたら、先生のお立場はどちらですか。

無藤　いいとか悪いではなく、別の世界にわれわれは住んでいるということを前提にして、子どものしつけなり教育を考えるということだと思います。ですから、先ほど浅い知識の話をしましたが、その浅い知識を深めるためには直接的な体験を、いかに入れていくかということを考えていかなければならないと思います。また、テレビ番組そのものの中でいえば、子どもがより深く理解できるテレビ番組のありかたを具体的に考えたい。現在の権威構造の問題でいえば、私は基本的にはいいことだと思います。児童の権利という関連でも、どの人にも等しく情報へのアクセスをできるだけ開くということですから、その意味では情報の制限をしない方向にもっていくのは、いいことだと思います。しかし、子どもが小さい場合、ある程度は保護されなければならないし、価値判断の手助けもしなければならない。その辺りを開かれた情報アクセスとどう両立させるか、むずかしい問題です。

深谷　マスメディアが発達したことによって個々のパーソナルな子どもとの対応ができていないと歪みがでてくるし、パーソナルな対応ができていれば、そんなに心配することはないということですね。そうしますと、基本的には学校の先生なり親たちが、子どもにテレビを見せっぱなしにするのはよくないということになるのですか。

深谷昌志氏

無藤　具体的な接触としては、その通りだと思いますが、現実的にはある程度は自由に見せるという方向にならざるを得ないと思います。親は見るけれど子どもはダメということは、小学生以上には通用しません。親がやっていることは、子どもにもやらせざるを得ない。そういう方向に、ますます進んでいくと思います。ただ、そうなると、おとなと子どもの境があいまいになりますので、その中で最小限、おとなは子どもに伝えなければならないことは、きちっと伝えなければならないと思います。

深谷　今のお話は、冒頭にでてきた豊かさにも同じ問題を抱えているというわけですね。今さら「ラーメンが食べたい」という時代には戻れない。また、逆にあの時代に戻ったからといって、必ずしも幸せになれるというものでもありませんしね。

無藤　貧しい時代には、それなりの不幸がありますから……。

深谷　ありますからね。ですから、「昔はよかった」というのではなく、現在は現在として、一応は現状を肯定して……。

無藤　情報化社会のよさは明らかにあると思います。例えば、今の小学生と私の小学生の頃を比べると、今の子どものほうが一般的に

物事をよく知っているし、考えもしっかりしている。昔のようにボーッと生きるよさもありますが、とにかく浅い知識でも、たくさんもっていることはポジティブに評価したい。その上で、より深くしていくためにはどうしたらよいのか考える。また、深い満足感を得させるためには、どんな体験をさせたらいいのかということを考えなければならないと思います。

深谷　外国にでかけますと、つい現地の子どもと日本の子どもを比べてしまうのですが、子ども部屋があり、テレビがあって、ファミコン、カセットがあってと、豊かな情報化という面では、平均して日本がいちばんです。最先端にきてしまったという思いがします。その一方で私たちは、自然の成長を妨げる環境にまで足を踏み込んでしまったのではないかという気がしますが、先生はまだ、そう心配したものではないとお考えですか。

無藤　そこまでは心配をしてはおりません。人間は体で生きていますから、それぞれ生理的なレベルがあります。今の子どもは多少、寝不足になってはいますが、それも極端ではありません。最小限の活動はあるわけですから、子どもたちの生活が20年、30年前と完全に変わったわけではありません。一部の子どもに睡眠不足などの問題はあっても、大多数の子どもたちについてみれば、1日に5時間もテレビを見ているわけではない。本を読むとか、人とつきあうとか、運動をするとか、人間としての最小限の要素が消えてしまったわけではないのです。それが消えない限り、根本的に人間がおかしくなることはないというのが私の持論です。

深谷　すると、今の状況を踏まえた上での対応策ができていれば、子どもたちの成長にそれほど心配することはないということですね。問題点があるとすれば、気になるところはどんなところでしょうか。

無藤　大ざっぱにいえば、ちゃんと育っている。しかし、それをよりよくしたいということでしょうか。先ほど申しましたように、体験的な活動の減少ですとか、あるいはよりよくというときに、どういう方向を目指すかということが重要で、子どもの主体的な要素をもっと増していかなければいけないとか、いろいろ考えられると思います。また、単に食べ歩きだけに歩くのではなく、もう少し深い情報から自分を創りだすというように、子どもなりの問題を考えさせていく。そういうものを現在のテレビ文化の中で考えさせていく。するとそこで、コンピュータの問題とか、あるいは場合によっては、コンピュータと違うものがでてくるかもしれない。

深谷　どちらがどう違うということですか。

無藤　コンピュータで、単にゲームをするだけではなく、プログラムを組むとか、コンピュータを使って様々な問題を解決するとかクリエイティブに使う。そこで同じメディアでも働きが変わるかなという気がします。

情報化の中で混乱を深める性の問題

深谷　最後に情報化社会における、性の問題についていかがでしょうか。

無藤　冒頭で今の子どもたちの欲求の喪失ということを申しあげましたが、いわゆる性の問題は例外なんです。小学生はともかく、中学生以上にとって、性は人間の生理的なメカニズムとしてかなり強烈な要素があり、欲望がなくなることはありません。性的な問題はどんなメディアでも、そこで解決できるものではありません。情報化の中で解消される問題ではないのです。むしろ、ある意味では情報化社会の中で混乱されているというのが現実ではないでしょうか。

深谷　テレビなどで伝わってくる間接的な性と、生身の性とのギャップが大きくなっていくでしょうね。

無藤　日本の現状はマスコミが性の問題を取り上げる割には、日常的に中学生や高校生の男女がふれあう機会が少ないと思います。そうしたギャップはよほど事情が変わらない限りはずっと続いていくでしょうし、情報化の

中で体や性的な悩みが解決されないとすれば、それは反動になってあらわれてくると思います。具体的にはシンナーとか麻薬などで身体的な感覚をどう処理するか、青年にとって深刻さは増すばかりで、取り締まってもどんどん広まっていくのではないでしょうか。

深谷　アメリカではケーブルテレビが発達していて、家庭には30局くらい入る。そうしますと、同じテレビを見ている確率は下がりますね。日本ではメジャーなチャンネルが決まっている。ですから、同じメジャーなテレビをみんなが同じ時間帯に見るということを考えると、マスメディアが与える影響は非常に強いものになるでしょうね。性の問題も、もっと多様なチャンネルがあると雰囲気もかなり変わると思いますが。

無藤　そうですね。今の大学生をみていると、ボーイフレンドとかガールフレンドがいない人は異常扱いされます。しかし、実はいない人のほうが多く、統計的には異常でもなく多数派なんですが、マスメディアでいうと妙に異常扱いされる。情報化社会の歪みですね。

深谷　情報化社会だからでしょうか、ディズニーランド周辺にあるホテルが流行ると、若者みんなが押しかけているようにいわれますが、あれなんかもほんの一握りなんですね。ですからマスメディアの中の成長というのは、個々の子どもの心に入ってくると割と寂しかったり孤独だったりして、方向性がないような気がします。マスメディア社会の中での成長のむずかしさみたいなものを感じるときがありますね。

無藤　そうですね。これは新しい問題だという気がします。

深谷　ありがとうございました。

〔対談を終えて〕

初めての人との対談というのはむずかしい。どういう展開になるかを読みきれないからである。正直にいって無藤氏との対談はやりにくかった。というのは、無藤氏の感覚や問題意識があまりに自分に近いので、無藤氏の発言にうなずくだけで、反論する気になれない。そうした意味で、いつもの対談と比べて、おだやかな内容になっているような気がする。そんな思いで対談を終えた。

文献紹介

『新・児童心理学講座⑪ 子どもの遊びと生活』

『新・児童心理学講座⑪子どもの遊びと生活』（共著／金子書房）から、無藤隆著「序章 子どもの遊びと生活をどうとらえるか」（P．6～P．13）を抜粋しました。

3　学ぶとは何か

生活の必要性の中で活動を毎日繰り返すことによって、子どもはその生活の活動を推進する技能や知識を身につけることだろう。また、遊びの中においても同様に、必ずしも子どもが生活の中で実行できないような事柄を、子どもたち自身の力で遊びの世界の中で作り出す必要性と繰り返しを通じて、再現し、やはり様々な知識や技能を獲得していくにちがいない。それと同時に、特に遊びにおいては、新しいものを創り出すということがあり、とりわけ、その場で新しく気づいた事柄から、むしろ必要性、すなわち目標を再構成するという逆の働きもあるので、そこに手段と目的の自由で柔軟な関係を学習する余地が生まれる。つまり、想像力の養成ということが遊びの中で可能になるのではなかろうか。

遊びと生活の中で学ぶということを考えた場合に、もう一つ大事なことは、実は、遊びと生活が全く分離して存在しているのではなく、多くの場合に、生活の必要性の中の活動の中に遊びの余地が生まれ、また逆に遊んでいる中に生活の必要性が持ち込まれるという複雑な関係が生まれてくるということである。例えば、食事をするにしても、ただ飢えを満たすために食べるのではなく、そこにおいしく物を味わったり、楽しくおしゃべりしたりするといった、より遊び的な要素が入り込んでくる。また、ままごと遊びのような典型的な遊びの中にでも、例えば、実生活の料理を再現するという意味において、そこに生活の必要性からくる活動が入り込んでくるし、また、ままごと遊びを進めるということとまさに並行して、友だち関係のあり方の調整という小さい子どもにとっての現実的な問題が入り込んでもくる。そのように、遊びと生活が絡み合う中で、さらにより複雑な学習が成立していくにちがいない。

4　学校と生活

子どもの生活を考える場合に、もちろん特に小さい年齢においては、家庭生活が重要である。それについての詳しい議論は、本講座の他の巻に譲りたいと思う。本巻（第Ⅱ章）では特に、学校という面を生活の一つの柱として取り上げた。幼稚園、保育園、また、その後の小学校、中学校などがその主なものである。現代の子どもの生活を考えた時に、そのようなフォーマルな学校制度のどこかに参加するということを抜きにして、子どもの生活を考えることはできない。子どもの発達と

は、決して自然状態（それがなんであるにせよ）において、成立するというのではなく、あくまでも子どもが生活していく中で成り立っていくものだとするならば、子どもが学校に通うということ、保育園や幼稚園に通うということの中で、そのことに強く影響されながら成り立つはずである。

そのことの影響を検討することは、実証研究としてはきわめて難しい。というのも、現代日本のほとんどの子どもがなんらかの形で幼児教育施設に通い、また、当然のことながら義務教育である学校に通うからである。それにしても、様々な類型が特に幼児教育においては存在するし、また、学校教育においても様々な形の教育形態が存在する。さらに、それを補う形で、おけいこごとや塾が存在している。

問題は、それらに子どもが通う中で、そもそも子どもはどのような経験をするかということ、そして、その経験の中で子どもは何を学び、その結果として長期的に何が発達していくのかということである。そのような問題は、例えば、小学校の算数や国語や理科や社会で個別に教える事柄を超えて、もっと長期的な意味で子どもが何を学ぶのかということでもあり、さらに、例えば、学校に通うこと自体の問題でもある。つまり、学校に何時間も通うこと自体によって、子どもの生活は大きく変わってくる。また、学校の中で教室で過ごすこと、授業を受けること自体によっても、子どもは大きく変化していくことだろう。それらのことの影響は、教科内容のもっと個別的な学習とは別に、おそらくそのことと絡み合いながら、成り立っていくにちがいない。そのことの検討は子どもの発達全体をとらえる上で大いに重要であるし、とりわけ、子どもが、その後、学校生活を続けていく上で、さらに、その子どもが大きくなって親になり、その親の子どもが学校に通う段階においての親としての信念や期待を形作る上で重要になるはずである。

5　遊びと発達

特に、遊びは、子どもの発達を形成する上で重要な役割を果たすと信じられている。しかし、事実それが正しいのか否かはかなり難しい問題である。というのも、遊びは生活から切り離されたところで存在するがゆえに、とりあえずは役にたたないものであると見なされるべきであるからである。事実、いろいろな遊びをすると、子どもの発達がそれに伴ってよくなると単純に支持するような研究は乏しい。むしろ研究の焦点は、それ以前にもっと細かく、子どもが行っていく遊びの形態、また、その遊びの中で子どもが経験しているはずのことを検討し、さらに、その遊びの中で遊びを進める上で必要な知識や技能は何であるかを確定することに向いている。

第Ⅲ章でみられるように、近年その研究は目ざましく進歩し、多くのことがわかってきた。例えば、ごっこ遊びにおいて必要な事柄は何であるのか。それは、現実と虚構を区別し、遊びについてのコミュニケーションと遊びの中のコミュニケーションとを分けて伝達を行い、役割を的確に演じ、また、ストーリーを組み立てていくことなどである。ごっこ遊び一つとっても、そこにはかなり高度な働きが見受けられる。したがって、それを繰り返し行うことによって、子どもにとってなんらかの意味のある学習、そしてその結果としての発達が成立するにちがいない。

同時に、遊びは一人でなされる場合もあるけれども、友達となされることの方が多い。したがって、友人関係を作り出すことと遊びの発達というものには極めて密接な関連がある。むしろ、子どもにとっては、遊びを行うことはそこに新たな友人関係を作り出すことに他ならないし、また、新たな友人関係に支えられて遊びが発展するとも言える。

最後に、その遊びにおける最も根本的な問として、なぜ我々人類は遊ぶのかという疑問を呈することができる。むしろ、遊びは本能

的、あるいは生物学的な起源を持っているとも見なされる。そして、その基盤の上にたって、遊びの様々なバリエーションが文化によって構成されるとみた方がいいのかもしれない。そうだとすると、その遊びの最も根本的な働きは何であるのか。それは極めて難しい問であるが、先ほども述べてきたように、遊びの中においてこそ成立する自発性、あるいは能動性、また想像力といったことが挙げられるのかもしれない。

6　遊びの伝承と実態

遊びというものをとらえるときに、生物学的な側面だけを強調することはできない。同時に、第Ⅳ章で展開されるように、遊びは極めて文化的であり、日々新しく創られるものであるとは言っても、しかしまた、上の世代から伝達され、伝承されてきたものでもある。遊びの形態そのものが伝承されていくと同時に、文化が上の世代から下の世代へ伝えられるときの、その一つの媒体が遊びであるとも見なされる。そのような二重の意味で、遊びを構成する重要な要素が文化的な伝承というものである。

そのときに、誰が遊びを伝承するのだろうか。一つには親や教師である。あるいは年長の世代であろう。もう一つは子ども集団そのものである。子ども集団が特に異年齢の子どもを含んでいる場合に、少し上の子どもの遊びが少し下の子どもの遊びに伝えられ、また、遊び集団間で様々な流行があり、それが集団の間で伝播されていく。子どもは、そのような遊び集団に参加することによって、文化的な伝統を引き継いで、古くからの遊びを学び、そして、自分なりの新しさをそこにつけ加えていくのである。

しかし、現代日本の社会的な変化に伴って、遊びの実態は大きく変化している。とりわけ、自律的な子どもの遊び集団というものが、地域によっては豊かに存在しているが、別な地域においてはほとんど解体している。そのような場合には、子どもはかなりバラバラに遊んでいるか、もしくは、学校のクラス単位の遊び、さらにその中での仲良し同士の遊びというものになってしまっている。特に問題なのは、そこに異年齢間の交流が極めて乏しいということである。そこで、遊びの世代間の伝承が断ち切られるという危険が出てきている。そのことは子どもの自立を考えた場合に、極めて問題であろう。子どもは決して一人で自立するというわけではない。子ども集団として自律することに支えられる面がある。そこに参加する中で、子どもは文化的な継承の中で自立することを覚えるのである。

7　メディア

現代生活を考える上で、マス・メディアの分析（第Ⅴ章）は欠かすことはできない。子どもの生活や発達を過去の時代に理想化して、そのような現代的なものを抜きにしたところで考えるのは非現実的であるばかりでなく、子どもの生活のあり方そのものを基本的にとらえ損なっている見方ではなかろうか。むしろ、生活というのは必ず現代的な要素を含み込み、また、おとながやっていることが子どもの中に入り込むことによって成り立つものである。子どもの生活を、現代の流れの中でおとながやっていることと全く隔離することは不可能である。不可能であるばかりでなく、望ましいことでもないだろう。なぜならば、おとなの生活に組み込まれることによって子どもの発達は成立するのであるし、また、おとなの生活のある部分の文化を受け継ぐことによって発達が成り立つからである。

したがって、当然のことながら、子どものメディア利用は乳児期からすでに始まり、2、3歳になればかなり多くの子どもがテレビを見、絵本に接する。その後、5、6歳以降になれば、近年、テレビゲーム、さらに上になればコンピュータとの接触が増えてくる。それらの影響は、その時間数に比例して大きいと言うべきか、あるいは、時間数の割には小

さいと言うべきか微妙なところが見受けられるが、しかし、子どもの生活の重要な要素を現に担い、そして、発達を作り出す一つの重要な原動力になっていることは明らかである。

そのようなメディアは、多くのものがマスとしてのメディアであることによって、子どもの生活を一方で画一的にしていくことも確かである。文化の伝承というものを大量の形で可能にすると同時に、むしろ個別の地域ごとの遊び集団を介した伝承を崩しているという面もある。また、子どもの自発性に根ざした遊びという側面を、規格品を伝達することによって壊しやすくもしている。子どもの生活の様々な必要性の中で子どもがしなければならないことを必ずしも容易にはさせないように、子どもの時間を奪っている存在でもあるだろう。

しかし同時に、そのようなメディアは、子どもにとっての時間、空間を大きく広げるもう一つの手段でもある。したがって、問題は、いかにして子どもがそのようなメディアをより能動的に使い、また、メディア以外の時間との緊密な関連づけを行う中で、自らの発達の中にメディア経験を取り込むことができるかということになるにちがいない。要するに、メディアが子どもの生活を豊かにし、その結果としてより多くの学びを可能にし、また、その結果、望ましい発達をなしているのかが問われるのである。しかし、それはメディア単一の問題ではなく、メディアを利用する子ども自身、また、子どもを取り囲む家庭の親や教師の問題でもあるというべきである。